Wilson
Oct. 1895
No. 415

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百拾五號

要目

社說
親ごゝろの欠乏◎一女傑亡びぬ

隨感
富岳を見よ、白蓮を見よ◎古きは眞なり◎自から知らざるの痴態◎人情幾微の轉換◎裁判するなかれ◎一杯の土に言ふ◎病や泣かんずらん

女學
軍人女學に熱心す……
繼母と繼子(三)……橘村居士
發句四……泡鳴子
裁縫科與點標準……渡邊辰五郎
生徒幼兒活力體格檢査表……女子高等師範學校

評論
亡友反古帖……島崎藤村
現社會の宗教的傾向……清陰
俳諧文問記……知十坊

爛煥
愛笛を惜むの詞……悠々子

片々
最初の外來女宣教師が日本傳道の昔語◎高等女學校全盛の時期◎女性作家◎日本女流の文學◎通俗佛教婦人論◎日本當世三書家◎千衣製裳裁縫施供勤進の疏◎家庭詩人◎髮の結方に制限を設けよ◎婦人の傳道事業◎女教師の利害得失◎寶藥を敵とす◎海江田氏母堂◎婦人共愛會◎岩崎久彌氏妹

明治二十八年十月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百拾四號目次

社説
輿論の調鑑みざる可らず

評論
教界信條論
非功名心論

隨感
・法王の夢幻
得んとする者は之を失ふ
(局の聲 四の音)

女學
纖けき纖子
女學伸張の活動機
高等女學校全盛の時代
割り當教師派女學校
裁縫教授細目

爛熳
愛作心之家(櫻井鷗村)

時文
アニツンのドラ　鄂軒の罵調　大隈伯昔日譚
後の三日月　代議政とやけ火害　八頭の大蛇
東京學院講演錄　水雷艇

片々
下田歌子女史　野中兼吉氏夫人　近着救世軍中の女傑　一滴の微笑　三井高保氏女學校への義捐　女學雜誌によりて戀す　奥村五百子　龜等　女學校の新設

第四百拾參號目次

社説
[illegible]の流行を論ず

女學
女生の高等修學及修行
纖けき纖子(櫻軒居士)

爛熳
凱旋將士(東京東山漫遊三味線山村)
破れ衣(淺水艶)
作ふいふこと(幽花艶士)
秋頭占紙(かもめ生)
耐有櫻井鷗村作氏永獻

隨感
未な觀ふ
月上り花開く
菜な辻る
・元良博士の學説
愛の祭しもさ
紀念すると能はず

新刊書
文藝倶樂部　不言不語　谷村[illegible]　四の緒　日本
名家談叢　なにか　水中[illegible]

片々
女學振作前の反響　女子教育の發達　女子德育、紙製小學女教師　今度我校婦女子の心得、女小學の試驗　穩行の大探偵女の夫人　本年、米作の南路の婚姻　高良時代の賢婦　支那最初の女醫學士　チエカノいるナイナの流り、易き音品　最易き字音　青志の調　たのしきこさこみ　戀さ宿　前田行縣の女學演説　香川高等女學校　下田歌子女史　可哀工女　佳人の死刑執行人　ボンガアー一家　大坂の職業者　義捐　万朝報風台大台　京都婦人手藝會　相愛看護婦會　鷹松町高等女學校　女な絶つの願掛

岡山孤兒院への義捐

女學雜誌前號本欄内に記載せる「天下の仁人に敬告す」の檄に對し、本號編輯日迄に寄贈せられたる義捐金如左。

金貳圓　東京　友人より
金參圓　東京　友人より
金參圓　東京　正教婦人矜恤會
金壹圓　名古屋　吉田勇子
金壹圓　佐世保　川崎鶴子
金貳圓　岩代川俣　加藤直士

計　拾貳圓也

岡山孤兒院 王子孤女學院 義捐怪力奇術

右岡山孤兒院の爲め、併せて王子孤女學院特別資本の爲め、茲に**大山侯爵夫人、津田梅子、小鹿島筆子**の三氏發起せられ、今回渡來の**米國婦人アボット嬢**が怪力奇術の義捐によりて、慈善演奏會を催ふさる。宮内省官人も此の主旨を賛けて臨場せらるべし。入場切符は當日會所にて賣捌き、亦た弊社に於ても取次ぐ。寄附金壹圓、五十錢の二種とす。あわれ同胞、瞬然として來り臨み、其慈善の仁を寄せられんとを願ふ。

明治二十八年十月

女學雜誌社白

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

大日本海外教育會告白

夫れ國家獨立の根柢は國民精神の獨立にあり國民開明の基礎は各人教育の發達にあり故に先づ國人世界日進の智識を得文明の學藝を修め道義を明かにし博愛の精神を懐き天命を畏れて自重嚴莊の氣象を養ふ事懇切なるに非ずんば眞誠に長久に邦家の獨立を維持せん事は難しとす。今や帝國朝鮮をして眞乎獨立の基礎を固ふし大に革進する所あらしめんとするに方りては則ち亦大に之が教育を振張し之が精神を脩養せざるべからざる也。抑も東西歴史を別にし隨つて文化の態趣を異にす兩々各發達する所あり彼我互ひに特長を有し亦偏失を存す當に相施着して以て圓滿完全の美を成すべき也。然るに今や西洋大に東洋に待ち東洋亦大に西洋に得る所あらんとす方さに是れ東西相會して文化一新するの機勢にあらずや。而して大日本帝國此期に際するの天職は極めて光大莊重なり即ち東西の文化を合成し世界の大道を發揮せざる可らず即ち日東第一の聖地より起つて靈化したる新文明を宇內に布及せざる可からず眞とに是れ海外に教育を施く可きの使命を負ふものなり。是を以て我儕今方さに朝鮮國現時の狀態に同情を表し其教育の爲に懇ろに計畫し只管らに該國民の心靈を開導し其國力を涵養し其國粹を啓發し眞に善良強健なる一國獨立の基礎を育造せん事を期圖す。是れ我儕が

今上皇帝の勅宣を奉體し其最とも任ずべきの方面に盡忠する所以なり。乃ち玆に大日本海外教育會の組織を公衆に披露し先づ朝鮮國に於て事業の開始を爲さん事を告白す。冀はくは四方同念の君子惠然として贊同の情を寄せ此會抱負の在る所をして速に成達徹底せしめん事を。

明治二十七年十二月

押川方義　原田助
本多庸一　松村介石
嚴本善治

大日本海外教育會憲法

第一條 第一章 目的
本會ハ海外ニ教育ヲ施クヿヲ目的トス

第二條 第二章 名稱及位地
本會ハ大日本海外教育會ト稱シ本部ヲ東京ニ支部ヲ地方ニ設置ス

第三條 第三章 役員
本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長 一名　副會長 一名
會計監督 一名　評議員 十名以上
理事 一名　支部幹事 若干名

第四條 第四章 役員選擧法
役員ノ選擧ハ左ノ方法ニ依ル
一 評議員ハ會長副會長及ビ會計監督ヲ選擧ス
二 會長ハ會員中ヨリ評議員ヲ選擧ス
三 會長ハ理事及ビ支部幹事ヲ撰任ス

第五條 第五章 役員ノ任務
役員ハ左ノ任務ヲ負擔ス
一 會長ハ會務ヲ總理ス
二 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アル時之ニ代ハル
三 會計監督ハ本會ノ財政ヲ監督ス
四 評議員ハ會務ノ大綱ヲ議定ス
但シ會長副會長及會計監督ハ評議員會ニ列シ議定ノ數ニ入ル
五 理事ハ會長ヲ補佐シテ事務ヲ處理ス
六 支部幹事ハ會長ヲ補佐シテ支部ノ事務ヲ處理ス

第六條 第六章 役員ノ任期
役員ノ任期左ノ如シ
一 會長副會長及會計監督ハ 五年
二 評議員ハ 三年
三 理事及支部幹事ハ 不定

第七條 第七章 會員
會員ヲ分チテ左ノ三種トス
一 通常會員
二 特別會員
三 名譽會員

第八條 第八章 會員ノ權利
會員ハ左ノ權利ヲ保持ス
一 會員ハ役員ニ撰擧セラルヽヿヲ得
二 會員ハ評議員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルヿヲ得
三 會員ハ會務ノ實況ヲ調査スルヿヲ得

第九條 第九章 基本金
本會ノ基本金ハ其利子ノ外經常費ニ支出スルヿヲ得ズ

第十條 第十章 憲法ノ改正
本會ノ憲法ハ總會出席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ改正スルヿヲ得
但シ全會員半數以上ノ出席若クハ意見ヲ得ルニアラザレバ憲法ヲ改正スル總會トシ認ムルヲ得ズ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

附則

第一條　本會ハ設立ノ初期[illegible]ノ教育ニ從事ス

第二條　[illegible]法第[illegible]條ニ依レル會長[illegible]會長及會計監督ハ初回ニ限リ發起人之ヲ指名ス

會則

第一條　本會ノ目的ハ左ノ規定ノ如シ

一　本會ノ目的ニ[illegible]一定年[illegible]以上[illegible]出金ノ定[illegible]會員[illegible]ス[illegible]者ヲ通常會員トス

一　[illegible]ヲ[illegible]以上ノ寄附[illegible]又ハ五年間會費[illegible]タル者ハ終身會員トス

一　[illegible]者[illegible]特別會員トス

一　[illegible]名譽會員トス

[illegible]本會ニ[illegible]者ハ[illegible]本會事務所ニ通知シ[illegible]長ノ[illegible]

[illegible]會員ハ會員[illegible]門[illegible]スヘシ

[illegible]本會ハ[illegible]ヲ得

[illegible]會ノ[illegible]ヲ[illegible]會ヲ開クコトアルヘシ

[illegible]本會ノ利子

[illegible]

[illegible]時ハ之ヲ受ク

東京[illegible]町[illegible]丁目[illegible]番地

大日本海外教育會事務所

賛成員及會員第一回報告

伯爵　井上　馨

伯爵　大隈重信

伯爵　[illegible]

子爵　[illegible]

子爵　[illegible]

子爵　[illegible]

子爵　[illegible]

子爵　[illegible]

子爵　[illegible]

北垣國道　前島密　[illegible]　日下[illegible]　島田三郎　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]木[illegible]　[illegible]木[illegible]　中野武營　[illegible]　[illegible]　北里柴三郎　安[illegible]太郎　加藤[illegible]　[illegible]　佐[illegible]

杉村[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　小島[illegible]　[illegible]

堀池政敏　佐藤昌助　新渡戸稲造　仁平豊次　伊藤重　八尾新助　大隈元信　海老名彈正　[illegible]　長谷川[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　宮[illegible]　[illegible]　[illegible]　工藤[illegible]　川目[illegible]　[illegible]　小[illegible]　[illegible]　[illegible]　佐[illegible]　北山[illegible]　[illegible]　[illegible]　岸川[illegible]　[illegible]　[illegible]　石川[illegible]　[illegible]　秋保[illegible]　田村武治

橋本經光　松田因太郎　福井捨介　渡瀨常吉　齋藤惝　佐藤勝三郎　[illegible]谷駒之助　竹内清明　外川平八　寺井[illegible]司　[illegible]森宇一郎　田中[illegible]一　[illegible]川有造　北山[illegible]次郎　小方仙之助　大工原銀太郎　[illegible]　[illegible]　入江[illegible]　[illegible]木壬[illegible]郎　大石[illegible]英　[illegible]野[illegible]代吉　[illegible]原宗治　[illegible]伯[illegible]一　田中[illegible]一　[illegible]田[illegible]雄　吉田[illegible]太郎　北山[illegible]殿　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]上[illegible]大郎　星野光太　[illegible]田[illegible]

林弘之　今井榮吉　秋山春齋　上山金之進　荒木眞弓　宮崎八百吉　蒲田[illegible]　[illegible]

瀧澤定興　寺澤精一　川口信水　丹羽金十郎　三浦虎彦　大室障夫　松本誠助　須藤鬼一　信太壽之　岡部久吉　宮島昇　押川ツ子　土屋勝郎　小野田卓彌　岡[illegible]吉　大久保寅吉　土井久彦　村上作太郎　松浦[illegible]之進　森野左近　[illegible]橋[illegible]郎　作間万吉　佐藤[illegible]　佐藤三郎　小野宗助　[illegible]地喜惣次　高城[illegible]郎　本川源之助　秦孝道　三瓶正綱　佐々木乾一　相見[illegible]　菅田勇太郎　東[illegible]

女學雜誌
第四百拾五號
明治二十八年十月二十五日發兌

社説

親ごころの缺乏

西國の哲士某が言へる語に人は親ごゝろを懷くに及んで初めて圓滿に達せり、これ猶ほ親たるとを得るに及んで身躰初めて成熟したるとを證するが如し、とあり。

知言なる哉、此の語や。人、この境界に達して、初めて洋々たる慈悲心あり、眞との獻牲自からにして生じ、爲す所ろ眞とに自由なり、故に此樂地に入りて初めて共もに妙味を談ずるとを得。左れば、親、其愛兒に接するの心を用ひて事物を遇するに至らずば、眞平に其事物の天眞を發揮せしめ了すると能はず。亦た此の事物を生かして、之より新たなる產物を生ぜしむると能はず。故に、親ごころは、總べての新生產に必要なり。此を欠きて生來したるものは總べて生命なし。之を缺きて行はるゝ所ろのものは、總べて器械的なり。此に浴すると不十分なるときは、所謂ゆる繼子育ちを爲す、其不健全なるは寧ろ無きを優れりとするに至る。

左れば、人は何事に限らず、親ごころを以て其の擔任せる事業に當らずば、之をして健康に生育發達せしめんとは難し。少年一時の客氣にて暫らくの激勵はよし壯んにするとを得べくとも、用ひて久しきに續かしめんは望みがたし。名聞福利の刺激、意氣投合の感情、行かゝりの事態、負けず嫌ひの競爭などにて、三十年四十年の大事業を成就し　遂げて其「妙」に達し、其「神」に徹するに至らんとは難し。

何たる因縁を自覺してにはあらず、之と言はん報酬を掛念してにはあらず、たゞ何となく引つけられ、情愛結合し、心神融和して、更めて離れんとの出來がたく、同牀偕老の眞實を以てたゞ〳〵之と同もに之と一つにあるとの何よりも悅ばしきぞ、即はち親ごゝろなれ。此心を以て、慈育し、其の成長を樂しみ、其發達を樂しみ、其結果を樂しみ、其活動を樂し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

み、吾は老の至るを覺らずして、たゞ彼の齒ひの重なるとを賀するに至りて、初めて親ごころを得たりと言ふべし。此心生動して、不知不識間に吾を激し、以て多年の事業に當らしむるにあらずば、大事決して成らず。

彼の拘々促々として、成業にわせり狂して而して倒るゝもの幾何ぞ。悄然熾んならざるにあらず、赤誠ならざるにあらず、たゞ一點悠々たる自由獨樂の或物を欠くによりて、即はち大成せざると斯の如し。恨惜せざるを得んや。

蓋し、一事を成就し、一藝に秀達するは、容易の事にあらず。紫肉放心にして安くんぞ得んや。之を思ふと千思、之を試むると万試、凝念、巖よりも固く、所決、金鐵も猶ほ恥かしきの躰ならしめずんば、如何でか得んや。此の工夫、此の耐忍、此の刻苦に付きては、太はだ古人長老の所爲に敬服す、今人の及ばざるや遠し。左れど、單に此を以て成就するものにあらず、此の難路を經へ此門關に過ぐ、則はち、自由洋々の樂地に達し、初めて成業あり。所云ゆる「親ごゝろ」なるもの是れ也。

然るに、吾儕今人、かの先輩の克己すら未だ厚きを得ず、況んや、其の洋々たるものに成達するの妙地に於てをや。近來、総じて欠く所ろのものは、工夫修練にあり。工夫修練を欠く、故に未だ事業の爲めの親ごころを自得するに耐えざる也。蓋し、親ごころは、愛兒の爲めに刻苦を重ねたる慈悲ある人の多年の辛酸の后に初めて生動し來るものなれば也。

一女傑沒れたり

閔妃逝きぬ。半島唯一の女傑とせられ、東洋稀有の大立物として、多年政界の人士を翻殺せしめし彼女も、今は自から殺ろさるゝものとなりけるぞ哀れなれ。左りとても、藥は元來毒にして、毒なればこそ藥にも用ひらるべし。彼女多年要樞に中たり、一身毀貶の鵠となりしに見れば、仲々の傑物にてありけめ。たゞ定めなき人言のくせとして、彼女あるうちは、惣ての悪しきは皆な彼女に歸せられたれ。死せし今日より后こそ、初めて其眞價値も知られ、多少の苦忠も知られ、遠からずして渠を惜むの聲も聞えなん。彼女既に死せしか、左れど其評隲は永く生き存らへんなり。

二

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○富岳を見よ、白蓮を看よ

最も白きものは光なり、最とも黑きものは暗き也。今夫れ最白の光を以てして最黑の暗きに照る、黑白の差如此く明らけきはなし、盲者と雖ども豈に之を認めざることあらんや。然るに曰く、暗きは之を曉らざりきと。彼は己の世に來りしに世之を知らず、世は彼に造られたるに、世は之を接けざりきと。大救主耶蘇基督の人世に降臨せしことや、即はち斯の如かりし也。彼は其の圓滿なる實行によりてすら、直ちに其の近隣を感化することは能はざりし。彼は其家庭に於て其品格を悉くは承知せられざりき、彼が同胞は容易に其の徒弟とはならざりし也。彼が爲めに道を啓きたる第一の知己たる洗禮のヨハ子すら、時不遇、事不吉なること數々なれば、更に門弟子を送て新たに彼に確かめざることを得ざりき。嗚呼、光りは暗きにすら曉られざりき。况んや光明の極めて微々たるものに於てをや。古來卓出の士皆な知己すくなし、其の尠きは即はち當然なるのみ。乃はち、當然なりと雖ども、豈に情懷の遺憾なからんや、間ま流露して其衷赤を見めすものあり、後學當に之を味ひて、寧ろ、古人を尙友とすべき也。曰く、人の知らざるを憂ひず、人を知らざるを憂ふと、誰か之を道悟的冷靜の格言とは見做すや、掬取せよ、裏面、涙滴たり、血動くの情致なからずや。朋あり遠方より來る亦悅ばしからずや。嗚呼、還らん哉、還らん哉、我黨の小子……筏に乘つて海に浮ばんものは夫れ誰ぞと。想ふべし、孔夫子の聖にして痛んで尙ほ此の如くなるを。翻つて則はち彼の基督の事を念ひ思ひ、些さか其の大御心を覺るを得ん。左れば、孤立してさびしき人は、仰ひで富岳の如何に沖天に彼ひとり寂寥たるかを思ふと共に、耶蘇基督のローンリ子スを想え。人世無情、冷淡の批判暴りに吾を强ゆると歎かんものは伏して幽微を開き蓮花を描くべき大地の如何に野人に踐せらるゝかを思ふと共に、亦た又何如に、耶蘇基督の匹夫下郎に裁斷せられたるかを想え。

○自知らざるの痴態

人は自から得手ぬとを得手の如く思ふの僻あるものなり。此僻のおかしきと、殆んど噴飯せしむ。試ろみに直ちに人に問ふべし、君が長所は奈何んと。其の殆んど表裏にひとしき答を為さゞるものは稀なり。吾儕に其の理わりを思ふに、此は蓋し、有意識即未熟なるの故か。人の自から知るとや亦難ひ哉、詮ずる所ろ、事實に衝突して、自個の長短を實地に覺識するの外あるべからず。

○人情幾微の轉換

官人某、今の責任内政客に語ふて日く、諸君が車に乘つて遊說せらるゝ間は、倘は大丈夫なりと。三宅雪嶺、此一句を標子として、當今說客の首途に餞し、以て黨者の大ひに儆すべきとを論ず。介石子亦た今の民間黨が民間に勢力なき所以を叙して、其の同情の足らざるを戒しむ。凡そ此等の論はた時事に屬するものゝ如くして、實は至大の要點に中る。人情幾微の轉換、此邊常識の消息に關はらざるはなし。論士の眼睛、此に向ふは慶事なり。冀はくは、規矩繩墨の冷やかなる理窟詰と一交替せしめん。

○古きは眞なり

歷史は一國の傳紀なり。此の傳紀の遂に記す所によれば、義は必らず徹ると言へり。傳紀は、個人の歷史なり、此の歷史の論結する所によれば、仁は必らず隣ありと言へり。格言は、常識を詮じて其通要の理を束ねたるもの、此の通理の主張する所によれば、愛他即はち現誠の利なりと言へり。老人は、人の世故に經歷して、辛酸甘苦を嘗めつくし、以て人情の實相を知了せるもの、此の實相の知者は言はく、眞面目の事必らず行はると。左れば、此等の言教は即はち究極の眞理なり、人事日常の究極する所ろ遂に此に至らずして止まんや。たゞ夫れ青年、學窓に於て「道」を學び、世に出でゝ多くは齟齬し、猶はち「道」の行はれがたきを歎ずと雖ども、是れ何ぞ半途の小懷疑たるとを免れず。更に破して一段の進みを爲さば、古來悠久の示す所、先人長老の語る所、何んぞ遂に吾等を欺かんや。眞理は、平凡多年の常套語の外に出でず。常套語即はち到底究極の落着地を示指して未だ嘗て僞はるとあらざる也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○裁判するなかれ

人を責むること寛にして、自から責むること嚴なるべしとの教は、世故に經歷し、人情に翫味するとの度び重なるにつれて、彌よ更に思ひ出でらるゝ格言にてありける。つら〳〵視るに、人の慷慨して大に罵しるときや、反つて自個が貌影子に向つて憤怒するの事あるを多しとす。而して、彼人眞誠に自個亦た當該の病ありとは覺らず、慨然涙を揮つて切りに他に對して苦言するの爲躰を見れば、其の殊勝にしていぢらしきを念ふと共に轉た亦た自省して、人なるもの丶自から知らざる遂に如此きかと氣付き、人間弱性の憫れにして最と情けなきことを悲しむ。看よ、他を責むるときは、理想を以てし、自から辨ずるときは、常識を以てす、他に向つて、常に斯あるべき筈なりとして裁斷するものは、自個の爲めには容赦して、人情若あることを得ざるものぞと自から加減するを常とす、之を迂と言はんか、之を痴と言はんか。嗚呼、公衆の爲めに公人を評論し、邦家の爲めに邦家の事を痛言するの外は、人は私しに他を審判することなきぞ善かんめれ。

○一杯の土に言ふ

一杯の土を握り、つく〴〵と眺めて語りけらく、汝、抑も何人の死灰ぞ、嘗て世に時めきては、紅顏の微笑となり、佳人が細腰となり、權ある人の笏を揮ひし手腕となり、猛者が劍を揮ひ汗馬にふみはだかりし力ともなりてありけめ、然るに今ま、幾度びか匹夫の足にかけられ、情なく鋤き返され、稍やくにして衣きし薄き苔ごろもは忽ち剝がれ、其の假初の休みの床より動かされしこと、幾たびぞや。汝、錦心を藏めて容易く、露はさず、春に及んで、僅かに其花を出せば、童子忽まち刈り去つて毫も顧りみず。かの花乃はち悲々として瓣を落し短命にして失せゆけども、汝が故鄕に還るあたはず、汝身を動かしかねて其遺躰を收めざるの歎きは察すべし。汝もし節を折りて身を賣ることあらば、方圓の器皿となりて、王侯の食膳に上り、山海の珍味を納れて、人生第一の榮華に飽かんは難きにあらぬを、自から好みて田夫に伍し、肥臭を吸入して、寧ろ米麥を産するの樂みに安んず。汝もし、瓦甓とならば、玉樓に上るは易し、汝もし花壺に許さば、堂奧に敬まは

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るゝは、其分なり、然れど、汝が依然として、舊態を守るは余が高しとする所ろなり。其色黑く、其つや粗らく、其味灰の如く、其氣何の佳なる所ろなくして、而して、裏に、幾多の花元をふくみ、時來れば、百卉千色の趣むきを見さんとす。嗚呼、朴々たる汝が風色の異なれる哉。土よ、泥よ。吾は汝を愛す、汝、久く迂々然として因循する、尤も愛すべし。

○病や泣かんずらん

かりそめの病も、既に常と異なりては觸感太はだ違ふ。一と度び枕につきて、伏して横さまに窺へば、立ち若くは座して竪に看下する所と異なるもの多し。障子のあけたての音、日光風氣の入れ工合、はなしの調子、挨拶の高低、太陽の色、人の顏色のつやなど、最と些細なるよりして、榮枯盛衰を觀ずる吾心の感觸、人生を味はふの態度、吾が身上條式、朋友、先輩を想ふの念慮等に至る迄で、僅かに一變せる色を呈す。人健康ならざる可らずと雖ども、亦た病ひなきを得ず。病んで病ひに學ばずば、病や單に其の無聊患とせらるるとを歎かんずらん。

女　學

軍人女學に熱心す

文明史の論ずる所によれば、尙武の時代には女學隆んならざるを常とす、之と相類して、人のうちの軍人も亦た餘りに斯道には熱心ならざるを常とするなり。然るに、去年日清間事ありて、帝國未曾有の大尙武心煥發してより此來、女學の氣運勃然として興起し、而も、軍人凱旋してより、彼等は皆な非常なる女學の賛成家となりけるぞ不思議なれ。抑も、此度びの戰爭より反つて女學を振起すべきの故由は、吾人既に之を論じぬ。かの軍人が俄に大の賛成家となりたる所以のものは一言せざる可らず。其理由は簡單也、言はく、教育ある妻を家に遺せし軍人は皆な名譽を揚げ、由緒正しからぬ女を妻とせし人々は、何れも留守中ふしだら千万の災を醸したりと。之によりて、人々初めて女學の重んずべきを知りぬ。

繼母と繼子　（其三）

扨以上述べ來りたる所は、繼子未幼稚なる内の事なり。追々年月を重ねて繼子が十五六歲以上ともなりては、繼母の方でも義理ある子なればとて遠慮が、世間の思はくに對しての外、當人の思はくに對して出れば、繼子の方でも亦、義理の母なればこんな事は言へぬとか、そんな相談はしにくいとかいふ樣な心配が出來る。其心配が亦互の廻氣の因となり、それが亦種々の緣に遇ふて大變なる事にもたちいたるなり。例へば繼母「枝豆の殼をそう處嫌はず捨てられては困ります、今掃除したばかりじやないか」と遠慮なく言ひたい所も、餘り度度は得言はず、チョッと激しき舌打をなし、又は「又……」と小聲に獨言をいひながら荒々しく掃除をして見せ、或ひは「そう一々言はなくつても、是位の事は大抵氣が附きそうなもの、繼母だと思つて馬鹿にして」などゝ他人に向つて述懷をするを聞いては繼子も亦嬉しからねば「それならそうと判然言ふて吳れたが宜いじやないか、言ふたら止めるに」と縱令口へ出して言はずも、それとはなく中てこするなり。さればとて繼母に於て一々それを言はゞ「實に八釜しくつて困る」などゝ他人に口走りなどするを聞いても、實母ならば一時の立腹のみにて心底からは慍らねど、根が他人であれば口では叱らねど、心の底にては腹の立つものなり。

尙他の一例を擧げんに。凡て現在の事について不足は誰にも有勝の事にて、親に向つても、如是もしてもらひたい、如彼もしてもらひたい、と思ふ事の絕えぬもの。それを實母にならば打明けて言ふに躊躇せず、實母も亦出來る事は出來る、出來ぬ事は出來ぬ、と言ふてしまふて事は濟むべけれど、繼母ではそう一々打明けて言ふわけには行かず、さればとて父親には勿論言ひがたき事なり、何うしたらと思ふ事の常に在るものなり。それを仕方も無い事と諦むるは並すぐれたる粹人にあらずば出來ぬことにて、普通の人、殊にまだ弱輩ものの出來ることにあらず。「おれの母は繼母だから困る」などゝ人に向つて述懷することもあるべし。そうすると繼母の方でも面白からねば「それならそうといふて吳れりやあ宜いじやありませんか、只默つてちやあ妾にだつて知れやあしません、ア、繼子を世話する程辛らい事はございません」などゝ述懷するなるべし。

右の如き些細の事は一年三百六十五日大方は絕えぬものなれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ば、それが積り〳〵ては、遂に互の胸に厭ふべき疑団物が出來て、果は互に何につけかにつけて述懐をするに至る。夫を又互に人に向つて分疏をする。其又分疏を洩れ聞いては、自分の噂をいふたのでは無いと言ふ事を證據だてんが爲めに互に其落度を見付けて置いては仰山に吹聴し合ふにも至る。其又果は然もなき事までに氣を廻はして、悪しく想像し、邪に推察して互に氣を悪しくするに至るなり。それが又積り〳〵ては彼の厭ふべき疑団物を然して恐るべき爆裂物となし、遂に些細の行違ひよりして破裂を來す事もあるべし。

と斯く言はゞ狭量なる讀者には或は受取りがたからん。然れども是れ當世一般の人の常態なり。其證據には人の中にて最磊落なる書生の中にても、これに似たる事の常にあるなり。凡そ人は誰と仲善くして共に樂まん共に苦しまんといふ美しき心は誰にもあるものなれども、人の心の異なるは其面の如きを以て、事を共にしたる暁には其異なる點が何時しかに衝突を始めて互に感情を害するものなり。今彼の磊落といはるる書生について之を觧せんに、仲善き書生が共に相談して同室に下宿して居るとせんか、其始め下宿する時及ひ其當坐は和氣靄々として洵に美しけれども、決して一年とは續くものにあらず「君は僕ばかりに掃除をさせる」とか或は「君は僕の烟草ばかり冷やかして居る實に狡猾極るじやないか」などといふ事より何時しかに感情を害し、果は心にそう思ふても口へは出さず、顔色ばかりに顕はす様になり、遂には一日も同室するが厭になれども、さて別れて見ると磊落な書生どしの事とて、直に仲が直つて互に戀しくなるなり。されど一方が女では然うは行かず、何時までもそれを根にもち、それからそれへと悪感情を増し行き、遂には甚しき結果にもなるなり。ア、こゝが即他人といふものか。況して繼母繼子の間に於ては、眞實母子にあらざるものが、母子の様なる交はりをなすを以て、其破裂も亦隨つて大にして恐るべきは怪しむに足らざるなり。

已に其當人どしの間のみに於て充分右の如き破裂的の原因を持てるに、まして彼方からも此方からも火に油をそゝぐが如き事をなすに於てをや。例へば繼子の叔母又は伯母の如きもの親切なる心より、其繼子を膝近く呼びつけ「お前は御繼母様がないのだからね、今迄の様な子供ではいけませぬぞ、此度

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の母樣とても根が他人だから、お前が確然して居てくれないと弟や妹の世話の仕手はありませぬぞ、兒でも出來たら猶の事、お前が確然しなくちやいけない、又母樣の墓參りなどもお前がしなくちや仕手はないのだから、忌日などは能く覺えて居て忘れてはなりませぬぞ、そして墓掃除も能くして草など生やす樣な事をしてはいけませぬよ、エ丶、能く了解りましたか」などゝ說き聽かせて、自然に繼母に對する感情を疎からしめ。又は近所近邊の多辯女ども「彼の女は未兒があるよ」「あるとも〳〵、未若いから、ほんとに彼の子は可愛相だねえ、彼の上に荷を殖されちやあ「だから御覽、ツイ過日まで餓鬼大將で困つたものが、近頃メッキリ大人しくなつた事ねえ」などゝ井端などにて高談話をなし。又は其繼子が旅行などして家をあける事などありて歸り來らば、其處へ行つても此處へ行つても「イヤお前さんの留守で母樣の墓は是々であつた事はの、イヤこれ〳〵で何でも無い事に美ちやん（妹の名）を殘酷くして可愛相であつた事はの、イヤ彼れではお前さんの荷が重くつて可愛相だ事はの」と御世辭のつもりで恐ろしき毒舌を弄する事もあるべし。而して、あれやこれやを聞き繼子は、漸く人心が出來たとはいふもの丶、未弱輩もの丶事とて「可愛相だ」と言はるゝが嬉しく「荷が重い」と言はるゝが悦ばしく、極素直なる子にても態と每日〳〵墓掃除に行きなどして繼母の心持を惡くさせ、甚しきにいたりては何となく自身の身の重きを覺えて、自然に繼母を見下す氣にもなり、繼母の吩附し事などは屁の如くに思ひなして碌々耳にも入れず、何かにつけて口返答をなし又は繼母の仕草に批難を試みなどする事も有りかねぬなり。かうなつては如何なる素直なる繼母とても其子と多少の衝突は起らずに居らず、起つては又近所中の多辯女ども「イヤ彼方が無理だ事はの無理でない事はの」と、せずもがなの評をなす、それや是れやが何時しか繼母の耳に入りては「ア丶厭だ〳〵、後妻などに來るものじやない、兒の出來る事まで厭にをかしく言ひ囃され、オマケに子供にまで馬鹿にされて堪つたもんじやない、とはいへ家へ歸つては父樣へすまず、ア丶妾程つらいものが世にあろか」などゝ里方などにてツイ〳〵述懷するを若し合槌打つ人などあらば、女氣の嬉しさ堪らず、直鬪に乘つて「何時ぞやもねえ貴女、妾が夜少しも眠らなかつたもんで

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

すから翌日ツイとろ〳〵と居眠りをして居ると、彼子がマアこうです、母様居眠りなんかせずに為る事だけサッサとして下さい、そんな事で他人の家のお飯は喰べらりやあしませんよと、こうです、これではまるで奉公人です、奉公人だつて貴女、そんな口のきゝやうしちやあ居るものは有りやあしません」と「そんな事で他人の家のお飯云々だけオマケをつけなどして語りし事が、継子の伯母又は叔母などに聞えなば「マアそんな事を……彼の弟をして姑様居眠りをして居るんですもの、彼の子がそういふのも無理はありません、彼の子だつてねえ、彼れでもモー十六歳ですからねえ性状がありますさあね、段々彼の沢山の弟や妹を世話をしなけりやあならないと思つて、一生懸命に自身がやつて居るんですから腹が立つんでしやうよ」と大層に語せし事が反響して、直ぐ継母の耳へ入つては腹は立つても、新来ものゝ如何ともしがたく、其言葉深き胸底は益々鬱気深くなり、遂には可笑しき程の事に可笑しき程気を遣はし、思はぬ些事を引起す事もあるべし。今一例を挙げんに余の知れる或人、其子十六歳の時妻を失ひ、其翌年後妻を迎へけるが、それより何かにつけて内間の小騒擾絶えざりき。或時継子他より帰り来りて膳に向へば、好物の茄子の漬物の色見事なるがあるにぞ、嬉しとは思へど、流行病の盛なる時候柄とて遠慮し「母さんこれは毒であるまいか」と尋ねけり。然るに継母は何故か忽に顔色を變へ「妾はモー里へかへります、幾等何だつて余だ、妾が彼の子を毒害して何うするもんですかと奥の間へ這入つて仕度をしはじめ、止めても〳〵聴き入れず、近所合壁をはじめ親族中を騒がせしがツマリは自身の陰口の種を作りたるに止まりき。アヽ如是して遂には継母継子双方とも人並の感情を失ひ了り、果は謀殺故殺等聞くも恐ろしき大悪事をツイ〳〵仕出来すに到る事も、屡々世間には往々見聞する所なり、悲しい哉。

さて右の如く一旦破裂しては事が治まつて後も其名残は互の胸に残つて益々気まづく、気まづければ猶まづき程前述の如き事情は多くなりて、又何時かは破裂せずに居らず、二度破裂し三度破裂して後には互に顔見合はしても厭な気持する程にもなる事あるべし。そうすると子の方では家に居るも面白からず思ひて自然に外出勝となり、時として不平に堪へぬ時などには、朋友の家に三日も四日も便々と遊で居て帰らぬ如

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き事もある。而して其遊んで居る間には朋友の厄介にばかりもなつて居られねば酒の一盃も奢る。此方で奢れば彼方も亦奢る。斯く飲んだり食つたりして、氣の合ふた朋友と太平樂をいふて居る方が、家に居て繼母の顰め面を見るよりは面白くて、自然に課業も怠り勝になる。是ではならぬと奮發して、日課に取りかゝつても、又繼母と何か衝突の起りし時には氣が餒れて身に染まず、エヽ自暴だと又出掛る、又飲む。彼是して居る内には「君何うだ一度位はかまはないだらう僕が奢るから」などゝ惡い朋友に誘はれる事もある。元來不平でたまらぬ上に酒に氣が狂ふて居る時とて、ツイ〳〵其氣にもなりて遊廓の中などへ入つて見ると、俗人には餘り面白からぬ所にもあらねば、ツイ〳〵二度行き三度行きする樣にもなる。尤も人には良心といふものがあれば「アヽこんな事をしてはいけない」と二度や三度悔む事の無きにあらねど、不平が起りし時には又々朋友の處へ氣晴らしに行き、憂き忘れに酒など飲まば氣が狂ふて、エヽ自暴だ行け〳〵と、又行く樣になり又行く樣になり、遂には質屋の番頭に顏を知らるゝ程にもなるは當世一般の人の常なり。而してそれが何時しか父親に知れて小言をいはれ、一寸改心しても又前述の如き事情よりして始める。又叱られる、又始める、又叱られる。彼是する内には、叱らるゝになれて改心はせぬどころか却つて憤激し「あれが父親に知れる筈がない、乾度繼母が意地にかゝつて、己れの事を探偵して父親に言つけるに相違ない、失敬千万な」などゝ無法なる述懷をなす程にもなる。そうなつては既早遊興が身に染みて、容易な事にて改心すべきにあらず。尤とも朋友などが立身せし噂、學業の進歩せし事など、を見聞くにつけて、是ではならぬと奮發して急に勉強に取りかゝる事など無きにあらねど、一時拋げ遣りにせし事は、容易に順序が立ず彼是と面倒臭くして、遊惰になれたる身には辛抱六かしき、其上に前述の事情もあり、秘密の借財に責められなどして身に染まず。顧みて其朋友を見れば順序よくドシ〳〵と進歩して行き、早あれ程になつたかと羨ましく、口惜しと思へど詮方なく、エヽ自暴だと愈々益々遊蕩に耽る。父親は益々火の樣になつて意見する。其側には繼母が無言の中に針を含で居る。是を以て家に居るは針の席に居るよりも苦しく、餘程辛抱する氣で居ても自然に足めが外の方へ向いて行き、其

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

行く所は何れ善き所にあらず。彼是して居る間には、彼方へも此方へも、不義理の借財が何時の間にか出來て居て、自分では何うにも斯うにも遣繰がつかぬ様になり、遂に父親の眼を眩まさせる。そうなつては自分の身に弱味があれば、繼母に對しても以前よりは餘程遠慮する様になる。遠慮すれば自然に廻氣も出來「此身に弱身があると思つて僻易んでれば緩附め付けあがつて」と口惜しがるにも至り、前述の如き事情益々増加するのみにて減少はせず。果は二度も三度も父親に尻拭をさせるにも至る。そうなつては何處の親にしても只棄てゝは置かず、勘當するの、堪忍出來ぬの、と威嚇すを、最初は人を頼んで詫もすれど、果は「エヽクソ家に居てクヨクヨ心配をするより外に居る方が氣樂でよい、ナーニ何處へ行つたつて餓死することもあるまい」などゝ自棄を起して、處處に漂泊して職にありつかんとしても、遊惰になれたる身なれば、正當の職には永く尻が坐らず、可成身を勞せずして一攫にドカと儲ける事は無いか、と相場師の仲間などに入りても、素人の腕にて身の立つわけが無く、遂に窮して來ては、道徳の何のと言ふては居られず、雇壯士となり博徒となり、さては詐欺師の仲間へも入り兼ぬなり。

以上は其結果を極言したるものにて、世間の繼子悉くかくなり了るといふにはあらず。されども其傾向は確にあるなり、否これよりも甚しきに至りし實例世に乏しからず。そは後段に至りて述ぶる所あるべし。而して若し其天性により、又は其因が其縁に遇はずして、前述の如く放蕩遊惰の不幸に陥らずば、他の種々の縁に遇ふて種々の不幸に陥るなり。今悉く之を擧げずと雖も、其因は悉皆同一のものなれば、讀者推知すべし。今は只余が目撃したる一事實を擧げて其参考に供せん也。

發句四

泡鳴子。

竹一つ拾ひかけたり春の野べ。
星よりももろく落ちたり玉椿。
白竹も花咲く春の墓場かな。
せきこみのかけ合ふうちぞ安き暮。

裁縫科與點標準

裁縫科の教授監理術に二箇の要件あり。一を其の時限とし、二を其の得點とす。即はち、一は以つて敏速ならしめんが爲めに時に制裁を設くの法。二は、以て巧妙ならしめんが爲に技に奬勵を施こすの手段なり。茲に、各種の仕立物を撿査し、之に得點を附與するに方り、何如んの標準に率わんかにつき、渡邊辰五郎氏に聞く所、左表の如し。若夫れ、時限制裁の標準に至つては、女學雜誌前號を覧よ。

男服

袖口掛方	1.左 1.右
袖口	3.左 3.右
袖形	2.左 2.右
入形	2.左 2.右
袖付（表）	2.左 2.右
袖付（裏）	1.左 1.右
衿先	2.左 2.右
衽下	1.左 1.右
衽先	2.左 2.右
褄下	1.5左 1.5右
褄先	4.5左 4.5右
裾口	2.左 2.右
脇縫（表）	1.左 1.右
脇縫（裏）	1.左 1.右
脊縫	1.裏 1.表
衽付（表）	1.左 1.右
衽付（裏）	1.左 1.右
衿絎	2.左 2.右
揚	1.前 1.後
行	2.左 2.右
脊トヂ	1.
脇トヂ	1.左 1.右
衿付（表）	3.左 3.右
衿付（裏）	1.5左 1.5右
全體	20.
合計	100

女服

袖口掛方	1.左 1.右
袖口	3.左 3.右
袖形	2.左 2.右
八ツ口	3.左 3.右
袖付（表）	2.左 2.右
袖付（裏）	1,左 1.右
衿先	2.左 2.右
衽下	1.左 1.右
衽先	2.左 2.右
褄下	1.5左 1.5右
褄先	4.5左 4.5右
裾口	2.左 2.右
脇縫（表）	1.左 1.右
脇縫（裏）	1.左 1.右
脊縫	1.裏 1.表
衽付（表）	1.左 1.右
衽付（裏）	1.左 1.右
衿付（表）	3.左 3.右
衿付（裏）	1.5左 1.5右
衿絎	2.左 2.右
行	2.左 2.右
脊トヂ	1.
脇トヂ	1.左 1.右
全體	20
合計	100

男袷羽織

袖口掛方	1.左 1.右
袖口	4.左 4.右
袖形	5.左 5.右
袖付（表）	5.左 5.右
袖付（裏）	2.左 2.右
左襠	2.前 2.後
右襠	2.前 2.後
脊縫	2.
後巾	1.左 1.右
前巾	1.左 1.右
前下	2.左 2.右
衿先	3.左 3.右
紐付	1,左 1.右
衿付	7.左 7.右
行	3.左 3.右
全體	20
合計	100

女綿入羽織

袖口掛方	1.左 1.右
袖口	5.左 5.右
袖形	5.左 5.右
袖付（表）	2.左 2.右
袖付（裏）	1.左 1.右
八ツ口	3.左 3.右
左襠	2.前 2.後
右襠	2.前 2.後
脊縫	2.
後巾	1.左 1.右
前巾	1.左 1.右
前下	2.左 2.右
衿先	3.左 3.右
紐付	1.左 1,右
衿付	7.左 7.右
行	3.左 3.右
全體	20
合計	100

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

被布

袖口掛方	左 1. 右 1.
袖口	左 5. 右 5.
袖形	左 5. 右 5.
袖表付	左 2. 右 2.
袖裏付	左 1. 右 1.
八ツ口	左 3. 右 3.
左裾	前 2. 後 2.
右裾	前 2. 後 2.
背縫	2.
後巾	左 1. 右 1.
前巾	左 1. 右 1.
竪衿	左 6. 右 6.
前下	左 2. 右 2.
衽	左 3. 右 3.
飾付方	4
小衿格好	4.
小衿付方	2.
全体	20
合計	100

男單袴

後紐付方	左 1. 右 1.
前紐付方	左 1. 右 1.
腰板	表 7. 裏 4.
ツケヒシ	左 3. 右 3.
ササヒダ	左 5. 右 5.
一ノヒダ	左 3. 右 3.
二ノヒダ	左 3. 右 3.
フトコロ	前 5 後 3.
ケマワシ	左 4. 右 4.
アヒビキ	左 3. 右 3.
ナゲ	左 3. 右 3.
後布	左 2. 右 2.
前紐付方	5.
全体	20
合計	100

女襠無袴

後紐付方	左 2 右 2.
前紐付方	左 2. 右 2
後ササヒダ	左 3. 右 5.
前ササヒダ	左 5. 右 5.
後一ノヒダ	左 2. 右 2
二ノヒダ	左 2. 右 2.
フトコロ	前 5 後 5.
ケマワシ	前 4 後 4.
アヒビキ	左 3. 右 3.
紐付方	前 6 後 6
前一ノヒダ	左 2 右 2
二ノヒダ	左 2 右 2
全体	20
合計	100

シャツ

カウスノ穴	一左 4. 二 4. 一右 4. 二 4.
カウス	左 5. 右 3.
肩當	前 2. 後 2
衿付	表 1. 裏 3.
見返	左 2. 右 2.
前裾	左 2 右 2.
後裾	3.
馬乗	左 2. 右 2.
脇縫	左 2. 右 2.
袖付	左 2. 右 2.
釦ノ穴	一、4.
	二、4.
同	三、4.
同	四、4.
同	五、4.
衿先	左 1.5 右 1.5
手ノカンヌキ	左 1. 右 1.
脇ノカンヌキ	左 1. 右 1.
全体	20
合計	100

ヅボン下

前立穴カヾリ	一、4. 二、4. 三、4. 四、4. 五、4.
腰廻ノ穴	左 4. 右 4.
大穴	6.
腰廻	左 4. 右 4.
見返	左 3. 右 3.
背縫	2.
マタ	左 3 右 3.
ワキ縫	左 4. 右 4.
裾口	左 3. 右 3.
シツク	左 3 右 3.
裾口ノカンヌキ	左 1. 右 1
後ノカンヌキ	1.
前ノカンヌキ	1.
全体	20
合計	100

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女子高等師範學校附屬校園生徒幼兒活力體格檢查表

年齡	人員	身長 最大	身長 最小	身長 平均	體重 最大	體重 最小	體重 平均	肺量 最大	肺量 最小	肺量 平均	握力 右 最大	握力 右 最小	握力 右 平均	握力 左 最大	握力 左 最小	握力 左 平均	胸圍 充盈 最大	胸圍 充盈 最小	胸圍 充盈 平均	胸圍 空虛 最大	胸圍 空虛 最小	胸圍 空虛 平均	胸圍 以上ノ差ニ於ケル常時 最大	胸圍 以上ノ差ニ於ケル常時 最小	胸圍 以上ノ差ニ於ケル常時 平均	視力 正視	視力 亂視	視力 遠視	視力 近視	近視內譯 八十以上	近視內譯 四十以上	近視內譯 十三以上	頭圍 最大	頭圍 最小	頭圍 平均
自三年至四年	一二	三三〇	二九〇	三一〇	三、九〇〇	三、〇〇〇	三、四三四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一六五	一五二	一六〇	—	—	—	—	—	—	—	一六二	一五二	一五九
自四年至五年	四一	三五一	二八四	三一七	四、七三〇	三、〇五〇	三、六六一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一七六	一四六	一六四	—	—	—	—	—	—	—	一七〇	一五二	一五九
自五年至六年	三八	三五九	三〇七	三二七	五、〇七〇	三、二五〇	三、八三〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一八二	一四五	一六六	—	—	—	—	—	—	—	一七二	一五一	一五八
自六年至七年	四九	三六八	三二四	三五〇	五、二八〇	三、六〇〇	四、四一八	一、二〇〇	二〇〇	六一四	四、〇〇〇	八〇〇	二、〇一三	三、八〇〇	五〇〇	一、七一九	一九七	一五七	一七六	一九一	一五〇	一六五	一八	六	一一	四九	—	—	—	—	—	—	—	—	—
自七年至八年	五四	三九三	三三九	三六七	七、〇七〇	四、三五〇	五、一五〇	一、三〇〇	二〇〇	八五六	五、〇〇〇	一、〇〇〇	二、九五八	四、五〇〇	七〇〇	二、三三五	二〇五	一五〇	一八七	二〇一	一四二	一七五	二二	四	一二	五四	—	—	—	—	—	—	—	—	—
自八年至九年	四〇	四一四	三九〇	三七九	七、〇〇〇	三、〇九五	五、三四三	一、六〇〇	三〇〇	九二二	五、〇〇〇	一、〇〇〇	三、一三九	五、〇〇〇	一、〇〇〇	二、四七三	二二五	一七二	一九一	一九五	一五四	一七七	二二	五	一四	三九	—	—	一	一	—	—	—	—	—
自九年至十年	五六	四三〇	三六〇	三九九	八、〇五〇	四、二〇五	六、〇一六	一、八〇〇	六〇〇	一、一九九	五、五〇〇	一、〇〇〇	三、六七七	五、〇〇〇	八〇〇	三、四一四	二二六	一七〇	一九九	二二二	一五九	一八四	二五	五	一五	五四	—	—	二	二	—	—	—	—	—
自十年至十一年	四八	四九二	三四九	四二三	一〇、八八〇	四、五七〇	七、〇二二	二、二〇〇	六〇〇	一、三三〇	七、〇〇〇	一、二〇〇	四、〇〇五	七、〇〇〇	一、五〇〇	三、五四六	二六五	一二〇	二〇六	二五〇	一〇五	一九一	二九	八	一五	四六	—	—	二	—	二	—	—	—	—
自十一年至十二年	三〇	四九五	三八五	四三二	九、八五〇	五、〇五〇	七、四一一	一、九五〇	七〇〇	一、三四五	八、二〇〇	二、一〇〇	四、三九五	八、五〇〇	二、〇〇〇	三、七二三	二四四	一九二	二一四	二三〇	一七五	一九九	二七	五	一五	二七	—	—	三	一	二	—	—	—	—
自十二年至十三年	四一	五〇〇	四一一	四五七	一二、三〇〇	六、五〇〇	八、五〇八	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、五〇三	八、〇〇〇	二、五〇〇	四、四六八	八、〇〇〇	二、〇〇〇	三、七八八	二六二	一九七	二二一	二四三	一七五	二〇五	三八	一〇	一六	三五	—	—	六	五	—	一	—	—	—
自十三年至十四年	三二	五二二	四二七	四七七	一三、三七〇	七、〇一〇	九、六三八	三、九九〇	一、三〇〇	一、九〇〇	八、〇〇〇	三、一〇〇	五、五二七	八、〇〇〇	二、八〇〇	五、〇七三	二七〇	一九六	二二二	二四〇	一八四	二〇五	三三	三	一七	二七	—	—	四	二	二	—	—	—	—
自十四年至十五年	三六	五一五	四六〇	四八七	一四、四〇〇	八、一八〇	一〇、四三三	二、一九〇	七一〇	一、六八一	八、〇〇〇	三、五〇〇	五、八七八	八、五〇〇	三、〇〇〇	五、三三二	二七〇	二〇六	二三七	二五六	一八〇	二二一	三〇	七	一六	三一	—	—	五	三	—	二	—	—	—
自十五年至十六年	三五	五一二	四五四	四八六	一四、三三五	八、〇五五	一一、〇二七	二、三〇〇	一、〇八〇	一、七一六	八、〇〇〇	四、五〇〇	六、一二八	八、〇〇〇	三、二〇〇	五、五九四	二八五	二〇九	二五〇	二六三	一八九	二二七	三八	四	二三	三三	—	—	三	一	一	一	—	—	—
自十六年至十七年	一六	五〇五	四五二	四七九	一二、七一五	九、一二五	一〇、五三〇	二、四〇〇	一、一一〇	一、九〇三	八、二〇〇	四、八〇〇	六、三八九	七、五〇〇	四、〇〇〇	五、七九三	二七五	二三四	二五〇	二四八	二二〇	二三三	三四	一三	一七	一五	—	—	一	—	一	—	—	—	—
自十七年至十八年	一二	五二三	四八一	四九一	一三、一七〇	九、三二〇	一一、四二九	二、六一〇	一、一〇〇	二、一一一	八、〇〇〇	四、二〇〇	六、七二二	八、〇〇〇	四、〇〇〇	六、九〇〇	二七五	二五三	二六一	二五九	二三五	二四一	三五	九	二〇	七	—	—	五	三	二	—	—	—	—
自十八年至十九年	一九	五一六	四六二	四九一	一四、四五〇	一〇、二七〇	一二、三四五	三、〇〇〇	一、五〇〇	二、三六八	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	七、五二六	九、〇〇〇	五、〇〇〇	七、〇九六	二八〇	二三五	二六二	二六七	二二〇	二四九	二二	一〇	一七	一八	—	—	一	—	一	—	—	—	—
自十九年至二十年	二五	五一八	四七四	四九六	一四、七〇〇	一〇、三五〇	一二、五三二	三、三五〇	二、二五〇	二、六一二	一一、〇〇〇	六、〇〇〇	七、八〇〇	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	六、七二〇	二八五	二四二	二六五	二六七	二二二	二四七	二六	一二	一八	一九	—	—	六	一	三	二	—	—	—
自二十年至廿一年	二二	五三〇	四七四	四九八	一五、三五〇	一〇、五〇〇	一二、五四一	三、二〇〇	一、六〇〇	二、五三〇	一〇、〇〇〇	六、〇〇〇	七、七五〇	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	七、一二三	二八六	二四八	二六六	二六五	二三〇	二四六	三四	八	二〇	一八	—	—	四	二	一	一	—	—	—
自廿一年至廿二年	九	五一四	四六二	四九二	一三、三〇〇	九、六五〇	一一、六〇三	三、〇〇〇	二、二〇〇	二、六三三	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	七、七二三	八、五〇〇	五、〇〇〇	六、五五五	二七五	二三五	二五七	二五六	二一八	二三八	二一	一〇	一九	七	—	—	二	二	—	—	—	—	—
自廿二年至廿三年	八	五一九	四八二	五〇〇	一三、六〇〇	一〇、〇〇〇	一二、一二〇	二、九〇〇	二、六五〇	二、七五〇	一一、〇〇〇	五、五〇〇	七、七五〇	九、〇〇〇	五、〇〇〇	六、一四〇	二七八	二五一	二六一	二六〇	二二五	二四〇	二五	一六	二二	五	—	—	三	一	二	—	—	—	—
自廿三年至廿四年	六	五一〇	四七三	四九四	一三、七〇〇	一〇、七五〇	一二、〇〇七	三、一〇〇	二、五〇〇	二、八二五	一〇、五〇〇	六、〇〇〇	八、一六六	八、〇〇〇	五、〇〇〇	六、三〇〇	二八二	二五四	二六一	二六三	二三〇	二四八	二八	一九	二二	四	—	—	三	一	一	—	—	—	—
自廿四年至廿五年	三	五〇四	四八二	四九五	一四、八〇〇	一二、三七〇	一三、三五六	三、二〇〇	二、四〇〇	二、八〇〇	九、〇〇〇	七、〇〇〇	七、八三三	九、〇〇〇	五、〇〇〇	七、一六七	二九四	二六三	二七六	二七二	二四七	二九六	二二	一五	二〇	二	—	—	一	—	一	—	—	—	—

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

亡友反古帖

島崎藤村

北村透谷子の書捨たる反古にして、積んで其書齋に堆き中より、抜き集めて吾書架の一隅に保存し置きたるものあり、頃日かの反古を棚の上より取りをろし、塵をはたきて彼是と讀み行くに、亡友彷彿として吾眼前にあるが如く、轉た懐舊の情に堪えず。

飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし。俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして内部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として、靈活なる評家として彼を知れるものもあるべし。彼は常に吾に告げて曰く僕には友少なし、また強て友を求めんともせずと。然れども彼は勉めて交遊を怠らざりければ、彼を知れる知名の君子も少なからざるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより極めて深情ある親友として忘るゝこと能はざるなり。

歳月江水の如し。あゝ吾は舊友の再び見るべからざるを思ふごとに、歳月の人の希望を相容れざることを歎ぜずんばあらず。惜しいかな芳蘭夭折して既に二春秋、幽明境を異にして再び相語ること能はずと雖も、子よ、子よ、幽界の事は子が生前に於て想像せしが如きものありや、否や。いかに冷たき泥土に覆はるゝとも、いかに重固しき石碑を戴くとも、いかに一點の日光だも通ぜざる暗孔に押込めらるゝとも、子は今や何の傷むところ何の羈絆を苦しむところなきか。春くれば櫻の花の子が墓の上に散り、秋は秋草亂れ茂りて墓畔に露の玉の如きものありとも、子は今や何の情を動かすところなきか。今一度人間世界に歸り來つて舊友と相見ることを欲せざるや。嗚呼子よ、子が歩みつゝある「死」とは夫れ詩人の歌ふ眠の如きものか、眠ならば暫し眠にてもあれかし。

透谷子戲曲に志あり。彼が書捨たる反古を見るに、戲曲の稿を成さんとして成らざりしもの甚だ多きが如し。彼が遺稿また韻文に富めり、しかも多くは未定稿なり。私に思ふ文藝の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

事は一朝一夕にして成るものにあらず、其琴は一人の琴にあらず、其韻は一世の韻にあらず、夫れ鬼神をあはれと思はせ武き人の心を動かし男女の間をも和ぐる迄には、必ずや數多の詩人が熱情と苦心とを合せて、其の聲、其の力、其の火、其の涙、皆な活けるものとなりて琴心に宿らずんばあらず。吾は亡友の反古をくりひろぐる毎に、今日の詩人の苦心を思ふに堪えざるなり。

聽く「エオリヤン」の琴を窓前に懸くるや、風來つて之に觸れて音を成すといへり。思ふに詩人の生涯もまた斯の如きものあるか。透谷子が始めて詞壇に志せしは十九歳または二十歳頃なるべしと覺ゆ、當時風南子、無性子などの號あり。その頃の反古多くは散逸して首尾全からざるもの多しと雖も、草稿の吾許に存せるものにて、江藤浩作、新奇好男子（脚本第四齣まで會話躰）、南洲の石碑、薄命、袖はぬらさじ（韻文）、桃太郎遠征記、小兒の時、貴人（滑稽流の詩として中等以上の人士が遊惰放縦なるを詰責すべしとあり）、東北振興中原之鹿（小説又脚本めきたり）、林中會議、四條綴（脚本草稿）、世の感、文學の平天地、志士の門出、僧雄正坊、南洲翁（脚本第一齣丈）、洗禮を受けたる夕べ、これらは小說脚本韻文小品等の題目にして、論文の草稿には、女子に就て、嗚呼遊廓の大弊害、自由黨自身の病性、日本の婦人に代り俯仰天地に訴ふ、などあり。又手帳のはしに、余は預言すべし讀賣新聞は尤も賣れる新聞とならん、又同新聞より一の大なる戲曲家起らん、など記しつけたるもあり。

少年より大人に飛躍せりとはテインがバイロンを評したる語なり。透谷子の如きも亦然りと言ふべきか。彼が思想上の歷史に於ては、一步は一步よりも高く登れるにあらずして、寧ろ點々飛躍の痕を留めたるが如し。彼が二十二歳より二十三歳頃までの反古と思はるゝものには、人間村漫遊記、別乾坤搜索日記、初夢、地獄極樂界巡遊日記、我がいほり、お君、薄命兒、篁村翁を評す、渡守、太郎、東屋、無我村、漂流人、夢中の夢（韻文、嗚呼かく弱き人こゝろ、嗚呼かく強き戀の情、などの句あり）、たびごろも、平家行、常盤曲、文學家は果して聖書の所謂僞善者なる乎、當世文學の潮摸様、現今文學の批評、義經曲、春の曲、夏の曲、秋の曲、冬の曲、美文學總論、およその（脚本にして幾度か稿を草したるものと見

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之稿本三四あり、余は憶せずおそのを出さん若し多くの駁撃者あらば一部の反駁書を出すべし、などあり）、荒野の戰ひ（其脚色は、非常に壯饒なる野ありてこゝに付て蛇を平げたる一の大なる蛞蝓が野の長となり、でん〳〵虫が旗をかついで覇權を執行し居り、其臣下には蚯、蟻、とんぼ、蛍、いもむし、毛虫、蚯蚓、蟋蟀、松虫、鈴虫、轡虫、蛙、きり〳〵す、蟷螂、螽蟖、赤とんぼ、蝗、ばつた、ひぐらし、かじか、蚤、虱、守宮、蝶、油虫、蠅、蚊、げぢ〳〵、百足、芋虫、わらじ虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫、などありて蝴蝶を主人公となし、こゝへ蛇界より來りて彼等と戰ひ全く荒野となるの趣向）これら先づ重なる題目なるべし。

次に彼が蓬萊曲を草せしころの草稿には、月の宮（仙遊子なるものを設け富嶽の頂上に登り、風を呼び雲に駕して遙かに空中に舞ひ、人間界の汚濁を厭めて多くの仙人に逢ひ、遂に月宮を尋ねて無窮に入るといふ脚色）、護良親王（脚本の草稿）、往きし春、文覺上人、餓、春駒、西行法師を論ず、蝶の夢、源九郎義經（脚本草稿）、マンフレッドとフオースト、バイロンを論す、猿、當代の社會と文學、當代の文學について、などあるうち、

春駒　（斷篇）

第一　門出

北風に窓閉されて朝夕の
作となるもの書と爐火、
軒下の垂氷と共に心凍り、
眺めて學ぶ雪達磨、
けふまでこそは梅櫻、
霜の惱みに默しけれ。
霜柱きのふ解けたる其位に
朝風ぬるしけふ夜明け、
書の窓うぐひすの音に開かれて、
顏さし出せば梅の香や、
南か北か花見へず、
いづこの杜に風の宿。

耳澄まし暫く聞けば鶯の音は
「春」てふものをおとづれぬ。

×××××××

書とぢよ、筆措けかしといざなふは
いづこに我をさそふらん。
冬に慣れにし氣は結び、
杖ひき出づる力なし。

(この間見えず)

ひとむち當てゝ急がなん。
花ある方よ、わが行くは、
ゆうべの夢の跡戀し。

第二　霞の中

來し道は細川までを限りにて
霞に迷ひうせにけり、
春の駒ひとこゑ高く嘶けば、
吾が身もやがて烟の中、
戀にむせびてうなだるゝ、
招きし花はいづこぞや。

夢にまでうつりし花の面影を
訪ね來て見れば跡もなし、
深山路の人家もあらず聲もせぬ、
廣野の中にわれひとり、
かこつ泪や水の音、
花ある方にそゝげかし。

をりたちて清水飲まする駒の背を
撫でさすりつゝ又一ト鞭、
勇めどもいづれをあてとしらま弓、
思ひ亂れて見る梢に、
鳥の鳴く音ぞかしましき。

立ち籠むる霞の彼方に驅入れば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小高き山に岩とがり、
枯枝は去歳の嵐に吹き折られ、
其まゝ元梢に垂れかゝる、
さびしさ凄し、たれやたれ、
われを欺き、春告げし。

駒かへしこなたの森の下道を、
急ぎ降れば春雨の、
降りいでゝしよぼぬるゝわが足元を、
かすかにはたく羽の音、
かなたへ隠れて間もあらず、
鳴く聲きけば雉子なり。

マンフレッド及びフオースト（断篇）

大陸文學漸く其絶頂に達せんとし一世を睥睨せしゴエテも既に老境に臨み、其戴きし大桂冠未だ嗣ぐべき人あらず。忽ち大月をアルプス山上に懸け來つて一篇のフオースト、ゴエテが最後の傑作として、ゴエテが桂冠の眞價として、全歐洲を震駭せり。此時に當つてはシエーキスピーアの崇拜熱も漸く薄らぎて英國文學何となく寂寥たる觀なきにあらず。前世紀の罪と共にポープ、クーパア等の群雄は冷却せる玉樓の下に、無言の人となりて捲き去られ、シエリー、スコット等未だ大陸文學に對して傲顔なる能はず。

フオースト出でゝより幾年ならず、以太利に飄遊して豪逸俶儻の名をチヤイルド、ハロルドに擅ひしバイロンの手に成れるマンフレッドなる戲曲出づ。バイロンは此時尚ほ壯にして其の心想漸く詩情より實動を渇望するの域に進み、其書架を、其寢牀を、其老師を、其從者を載せて、富豪なる貴族の華奢を盡してアルプス山を越え、自ら詩界のナポレオンを以て許さんとし、峰巒を疾呼し、懸瀑を號令し、閃電暴雷を指揮し、崇嚴なる自然を透覗し、其幽玄なる至境に向つて萬斛の熱涙を傾瀉し去つて凱旋のシイザルに似たる意氣を以て三寸筆頭に迸洩せしもの即ちこのマンフレッドなり。

ゲエテの始めてマンフレッドに接するや、拍手して已れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のフォーストに想を同ふするを歎美し、能くも斯の如く其形裝を異にして類似せる奇想を縦にせし者かなと言ひし。而して、バイロンは自ら言ふ、われ獨字を解せず、フォーストを讀まざる前にマンフレッドの稿を脱せりと。フォーストはゲエテの傑作なり、世界の傑作なり、マンフレッドは實にバイロンの傑作なり、世界の一大奇觀と稱するも假譽ならじ。而して彼も鬼神談既に古文人の談柄に上るのみにして文界將に實際に進まんとするの時に成り、此も實に近代の鬼神を驅馳し、新創の幽境に特異の迷玄的超自然の理想を着て出でたり。第十九世記の雙見傑作と呼ばるゝも豈に怪しむに足らんや。

ゲエテも厭世家なり、バイロンも厭世者なり、ゲエテは其日記に書して「われ運命の好侶として生れ、福祥世に全かりし、然れども今年七十三歳、回顧してわが過去の生涯を見るに四週間の樂日月を得し事あらず」と。彼れ自ら言へり、わが詩を作るは自己を責むるなり、自己を罰するなりと。然れどもゲエテは其厭世家たるの分量に於て遙かにバイロンに及ばざりき。抑もバイロンが、天地を跼促たりとし、人生を悲劇の最極と觀ずるに至れるは、其搖籃の中にありし時より、否な寧ろ彼の幼少なるバイロンの爲に泣き、又た屢々小バイロンをして暗室に欷歔徹宵ならしめし母氏の胎中にありし時より既に其厭世的迷想の根蒂を固ふしたるを見るべし。而して又其美術に關する兩詩人の位地を熟察し來れば、兩者の理想の上に及せる隔離容易に看破することを得べし。ゲエテは古人も言ひし如く詩人よりも寧ろ美術家なり。其年齒未だ少かりし時山水の絶景に眩惑せられて、詩人と畫工との間に其前途を彷徨せしめて幾度も心を茲に迷はせりと言ふものあるを見ても、後來一世を震動せし大技倆は其詩精の分量を持ちたりしよりも多く自然の奥妙を恰も優婉なる少女が己れと同年齢なる己れと同位地なる美人の畫に對して精徹に觀察し細緻に分析するが如き美術的風流詩想の粹を踏破したるに歸すべし。

バイロンに至りては然らず、其詩は即ち神微なる自然の上に幻寫せるバイロン自身なり。卑猥なる人生を怒りて常に暴騰せる火煙なり、休憩すること能はざる慰籍する

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こと能はざる所謂「目を開きながらに切齒する」熱汗なり。思想は實にアルプス山より落つる崩雪の如く、然も想像は一小詩人よりも多からざるは、抑も彼が自己に餘りに「詩」にして想像を容るゝの閒室に事欠けばなり。故に其詩の如きも往々にして咄嗟の間に成り、洗練を積む事なかりき。プリゾナア、オブ、チロンの名篇も僅に三日子を費せしのみなりと聞けり、之を以て見るもバイロンは寧ろ詩人にして美術家の榮譽は最も少なく荷ふ事を得べきなり。

月前の柳

招く手は細くたゆめど空遠く
　なびかぬ月のうらめしきかな

花間蝶

心ありやなしやは知らず花の間に
　憂さをはなれぬ蝶ぞ床しき

雨後の花

雨過ぎて恨めしげなる花のをも
　ちるまで友と契らざりしに

逸題

淺しとな契りとがめそ浮世には
　離れ難きも離れ易きを

史

ふみわくる道の奥こそいづこなれ
　まよへとはたが教へそめけん

發句

行邊さへ香もきかせぬ岸の水

五緣十夢とは平生彼が戲曲に對するの希望にして、其内五緣の方は一緣も筆をつけず、十夢の中、公曉を主人公としての惡夢、則に蒼夢と題せしものも見たり、蝶の夢も亦この十夢中の一夢なるべきか。

蝶の夢脚色

第一齣　雙蝶を點出し花上に舞はしめ

第二齣　二人の少年男女を出して熱き愛情を寫し

第三齣　再び雙蝶を點出して
　蝶と人と同じきが如く同じからざるが如く
　すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

また左の如き想像と脚色とを記したるものあり、

蚯蚓を見て感あり

戯曲

蚯蚓、鼠、猫、狐、等いろ〱のものを人間位の大きさにして、形を造りて各その思ふところを言はしむべし、而して之を人に比較すべし

智情意の動物をして各其性質を顯はさしめば妙

吾が知りてより透谷子四度居を轉ぜり。高輪の舊寺に寓せし時、庭前草花あり、花園に隣りて畑あり、室のうしろは老杉鬱蒼古墳壘々としてかの「鬼心非鬼心」を草せしは爰なり。絃歌手高輪を去て芝公園紅葉館の裏手なる小堂に移りしや、絃歌手に取るが如く聞え、古木堂を擁し、蚊多く、室暗く、猫を捨てられて心を傷めし曉も度々なりなどいふ話もあり、老鼠堂の庵に近くして永機宗匠をやりこめたる話も聞けり。こゝも住みうくてや麻布に轉じ、山羊を買ひて面白からず、霞町に轉じてまた面白からず、後ち相州國府津の舊寺の一室を借受けてこゝに一家を樂しみ、波の音に蝶の夢を破られて再び都に上り、芝公園の舊堂に歸りて病んで再び起たざりき。嗚呼想ひ來れば吾が眼前に浮び出で、吾をしてこの文を草せしむと雖も、文に情なく詞に力なく不肖徒らに彼をして幽界のかなたに一微笑を催さしむるに過ぎざるのみ。

現社會の宗教的傾向

清陰

現時の思想界を觀測しつゝる者は、端なくも社會の宗教的傾向と、宗教の社會的傾向との二現象に觸れん、今予輩が此傾向を叙せんとするは、全く想界觀測の一種として爲すのみ、予輩の宗教に對する所見に至りては、光風霽月極めて公平無私なることを告白しおかん。

所謂、宗教の社會的傾向とは何ぞ、曰く宗教家たらんもの社會に出でよとの呼聲、即ち是れ、曰く宗教家の社會的事業を企圖せんとする傾向、即ち是れ、而して其の宗教家とは吾邦人士の大部に通ずる佛教徒を指すものにして、換言すれば佛教界の新傾向と云ひつべきもの、是れ出世間的に偏屈して衆生濟度の道を實行するの徒、尠なかりしに反動したる一現象なり、彼等は世間に出でたらん後は、如何の事業に着手すべき乎、今や其の考案に凝念する際中と稱して可ならんか、或者は已に着手し或者は躊躇して未だ決せざるなり。

所謂、社會の宗教的傾向とは何ぞ、決して古代の宗教的時代、信仰的時代を渇望するの謂ひにはあらず、唯だ具象的に熱

誠、靈活、偉大、壯高、義烈、眞率、嚴侃、氣慨等の要素を渴望するの謂ひなり、文壇上には抽象的に是等の文字を幷列するものありと雖も、而かも其の文字に慊らで、親しく現實の活物に接し、近く之を看んことを望むは、是れ今日人心の傾く一現象に非ずとせんや。

何が故に之を云ふか、熟ら遠く其の由來する所を察すれば、遠因近因數多重疊し來りて容易すくは分解して說明すること能はずと雖も、其の一二を擧ぐれば、大凡左の如きものあらん。

第一。國體及び政體の變遷、――維新後の變遷や万事に通じて著しきものあり、專制體は立憲體となり、敎刑一致の德治主義は俄然一變して法治主義となり、法治主義の形體已に具備して、而かも道德の進步なるもの、之に伴はざるの觀あり、されば民刑の二典、世の所謂正直者流、天保時代の遺物をして懷舊の情を起さしむるものある如き、其一因たらずんばあらず、悉しくは時事に渉るか故に止むべし。

第二、道德の支持者の變遷、――德川時代に於て民人道德の支持者たりしは、上流士人に儒敎あり、下流社會に佛敎ありたり、吾人は單に以上二者によりてのみ民人の道心を支持し來れりと認むるものに非ず、而かも最大勢力ありしとは疑ふ能はず維新後に至りて神道の一部をして政治と合着せん企ても存したりしが、概して社會の變動につれて、何れも衰頽し來れり、多くは政界に心を寄せ西洋の思想を容るゝに汲々乎として繁忙を極めたり又新人の基督新教、將に盛んならんとするに當り、歐化主義に反動する國粹論現はれ、頑固者流之を誤解し、儒佛神の三社會は、國粹發揮の旗下に集合し之に抵抗を試みたり、當時よりして基督敎も亦た何んとなく振はず成り來れり、即ち西洋主義といふを慊ふと同時に其の宗教をも嫌ふの風を生じたりき、而して目下の形勢は如何、神佛敎師は無學悖德として擯斥せられ、新學理もて彼此と批判せられ、罵詈雜言中に歷史的關係と社會的惰性とを假りて之を葬り去らんとする想界の現狀、何れを支持者と定め得ぬる人々は、抑も何者か道德の支持者たらんとの疑念を有するもの尠からず、即ち神儒佛耶の何れか、日本人の眞正の支持者たる乎、之を疑ふものも決して少數にはあらざるなり此の如きも亦た其の一因となりしか如し

第三、新主義新學說の浸入過多――新主義と云ひ新學說といふ多くは西洋より輸入せられしものにして、明治の人々が、其の名目の新奇を珍重し其の實物を深究せざりしの誹は後代の史家をして嘆息せしむる一事ならん、見よ、佛蘭西語を學ぶものは佛國の思想に傾きて、ルーソー、佛國革命自由の權利、決鬪、民約說、佛國の法律等いふもの痛く流行したりき。英語を學ぶものは英國の思想に傾きて、ミル、スペンサー、ベンザム、ペイン、ビーコンスフヒールド、さてはカーライル、なんどを崇拜し、唯利說、唯物進化說、一種の政治思想、英雄崇拜等流行したりき。獨逸語を學ぶものは獨逸思想に傾むきて、國家主

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

義、社會主義、鐵血政略、保護經濟說、さてはゲーテ、シルレル、レッシングを始めスタイン、グナイスト等崇拜せられたりき、否な是等は今尙ほ流行しつゝあるなり。即ち政治家も文學者も敎育家も多くは、語學と共に思想を變じ制度を化しつゝ來れり

(い)海陸軍　に於ては和蘭より佛、英、獨と變じ來れり、佛の陸軍は獨となり、和の海軍は英となりし如き、

(ろ)敎育上　に於てスペンサー流行したりと思へばコンペーレに來り、ヘルバルトに來り、又々風波を生じて彼此と批評する如き、各々長する所の語學より流行を來すにて、必然の要より來りしもの少し、

(は)文學上　に於ても馬琴の小說類は是れ古風の勸懲主義、夫れ小說は詩の一種にて美を發揮するもの、西鶴もよし春水も可なり、近松の院本がお山と色男を種としたる尤も妙、ゾラは寫實主義にて、某はサタイアリスト、裸美人は畫家のモデル、其のむき玉子然たる頗る美、セクスピヤは沒理想で、自然派と理想派も斯くの如し、夫れ何主義彼主義と呼はる聲は高くして、賑かなる次第なり、一廢一興一起一伏、邦人飽き易しとは誰か云ひ始めし言葉にや、文界の變遷能く之を表はす其他百般の事、新名義、新主義、新學說の輸入過多にして能く之を渾然融化せされば、歐洲に通性なく、支那に通性なき如く、我社會には殆んと通性あるもの少なし、今日國民の倫理、心理を究めんものは大に困難を感せすんはあらず、予輩は此現象を一の原因として數へんと欲するなり。

其他近因に於ては政治上、社會上、經濟上の關係亦た數多ありと雖も、斯には暫らく略して記さず、之を要するに、法律に重きを置くと同時に道德を重んせざる事や、唯物的唯利的思想の未だ融化せられずして却て害を爲すの傾向ある事や、一般の思想界未だ幼稚にして、何主義彼主義、甲說乙說等に拘泥着論するの弊脫せざる事や、冷淡なる哲學の嗜好稍多なりとするも眞正に情熱の燃ゆるか如き人物の少なき事や、勸懲主義の小說は攻擊せられて、眞個に之に代りて審美眼の程度に順應し能く高尙なる快樂を與ふるもの尠なく、徒らに淫靡の文筆を弄ぶとや、人間萬事は金の世の中なる黃金崇拜主義獨り隆んなる事等は、尠くとも眞正の宗敎心を呼ばんとせしめし原因たらずんばあらず、

蓋し明治の今日迄の社會は、亂雜なる調子あり、新名義を珍らしがりし現象あり、革新せられしと同時に固定されざる事物多く、大團躰としての特性あるものなく、何れも小狹の特性を以て互に新奇を弄ふの種多き社會なりしなり。

然り而して社會の宗敎的傾向は、如何に現はれつゝある乎、現今の思想界を觀測するものは之を識るに難からず、僅かに之を略述すれば、

(一)普通の日刊新聞紙上、宗敎に關する論評多く、其の社會の消息を報道するとに注意し來れり、是れ近來の一異現象なり、或は「今日の宗敎家」「宗敎家的の熱誠」等の文字所々に見ゆ、

(二)哲學敎育文學上の雜誌上、未だ曾て宗敎界に容喙せし事

なき種類の紙上に、漸く宗教の論評多くなり行きしは著明なる事なり。

(三)一般の人心は何事にも一定の方針、目的等を認めて安固の基礎を得んとするが如し、政治に於ても商業に於てもはた思想界一般に於ても其傾向見え來れり

然らば其の性質は如何、彼等は佛教とも亦た基督教とも云はず、又或る宗教の教理、信仰個條、其の哲學上の理論等を闡かんとするにあらず、唯だ眞個に宗教家的の人物の出でんとを望むものなるが如し、想ふに是れ古代の宗教家の如何にも偉大、壯高、義烈、靈活、熱誠の分子を有して、さも大人物なりしが如く思惟し來れるものから、其の勢力の大なりしを憬かしく思ひ憬ふの情に驅られしより來れるが如し、果して然らば今日社會の病弊は、何處にあるやを診斷するに難からざるなり、即ち其の病弊は眞正なる宗教的信熱、國民の大信仰の稍欠乏する所にあらんなり。

さて社會の宗教的傾向を帶び來れるは、遠因近因重疊して、自然の勢に驅られしもの、而かも現時の宗教界に戀着するに非ず、其の希望する所は單に、熱誠、義烈、眞率の人物にあり、思想にあり、勢力にあり、行爲にあるなり、唯だ之と聯想して昔日の宗教家を想出し、斯る宗教家、宗教といふ形容を附したるに止まるが如し、遮莫吾人は之を稱して社會の宗教的傾向と云ふを憚らず、又宗教界を革新せしむるの動機なりと看取するの至當なるを信するなり。

予輩は斯の如く觀じ來りて、終りに一言すべきとあり彼の哲學といふものや、活火にあらず吾人の心情之に依りて温か味を感ずるとなし、畢竟輝々たる燈明のみ眞理や瞭然たる光明なり、而かも冷かなると氷の如く吾人を動かすの能力あるにあらず、宗教や光り輝くの燈明にあらず、而かも彼には活火あるなり、さながら潜伏しつる火の如きか、げに宗教的信熱は吾人をして狂熱せしむるの力あるなり、其の神秘的情感の內容には、暗昧秘密にして捕捉せんとして捕捉すべからず、除去せんとして除去し得ざる如き勢力ありて存す、美術や光と熱との二つながら合着したるもの、其の兩者結着して吾人の眼前に現はるゝや、單純なる假象に外ならず、現實物や美ならざるなり、恰も吾人が夢中に於て光り輝き燃え出づる一團の活火を見、而して之に接觸したるが如く感ずるも、其の實は光りもせず亦た熱するともせざるに似たり。

而して宇宙の三人兄弟なる哲學者、宗教家、詩人は、人間の三靈性を滿足せしむる重大の責任を有するもの現時の境界は不整頓にして、不滿の聲充つるとも、民心振勵の動機は洵に是等三者より發出するものなれば心して其の任務を盡し、永遠無窮に人類の上に幸福の充てんとを力めざるべからず、若し夫れ宇宙の三人兄弟にして不健全ならんか、抑も何を以て社會の革新を果すべきか、無學悖徳の文字をして教界より除去せんとを努むるの好機は、げに今日社會の宗教的傾向の存する時にあるにあらずや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

俳諧又聞記（上）

知十坊

明治廿六年は俳諧創作の時代にして明治廿八年は俳諧評論の時代なりなんど言はんには亦又早稲田文學記者をして「言ひ回し大げふ過ぎたり」の評言を加へしむべき歟然れども明治俳壇に評論の聲を聞くの騒がしき未だ本年秋季の如きは非らざる也

評論の問題種類に就きては暫く次條に讓り先は現俳壇の情況に就き概説すべし

予が俳諧風聞記（參照九月十八日—十月一日毎日新聞）は素より隨聞隨録太だ杜選を免れずと雖とも略ぼ維新以降俳運の推移變革の一班を叙了したりしと覺ゆ而して其所謂新派なるもの丶消息を專らとせしものは畢竟新派なるものゝ數に於て小なるも力に於て大なる生命あり元氣あり發達進歩の望みありて明治俳壇の新勢力たるが故にありき然れども今の俳壇を談ず素より舊派の情況を却閑すべきにあらず少間眼を此方面に轉じ一瞥する處なかるべからず

一、所謂舊派なるもの

故中井櫻洲一日其舊知の老俳客に對して曰く余令尹として任に各地に赴く毎に俳人なるものを其地に索めば忽ちにして五千六千の徒あるを聞かざるはなし足下此多衆の好むところを好み咏ずるところを咏ず兀々年を窮む假令其妙に至るあるも到底碌々の數を免かれず何ぞ別に一頭を放出して他に文勳を奏せざると

凡そ我蜻蛉州の首尾、鯛は花は見ぬ里ありと雖も月並俳諧の集會あらぬはなく都鄙遠近到るところ社中あり俳人あり月に幾巻の冊をなさゞるはなし曾て千島擇捉島の冬間消閑方を類別せし者を聞く曰く一村は飲酒、一村は賭博、一村は荒色、一村は俳諧、亦又平民的文學の普及せる一班を覗ふに足るべきにあらずや而してこの多數の門徒あるがゆへに業俳として門戸を張るも猶能く維持し得る所以にあらずや

此儕輩が系統門流を探りて派別門別をなさば其間風調形式の異なきにあらずと雖も之を細叙するは沒緊要なるべし近今俳壇の事實より見て小異はしばらく棄て其大同なる點より之を「舊派」と呼做すは不可なきが如し「日本派」が目して「月

並流」の稱を以てするは亦此徒をいふものなり

舊派中の重なるものを舉くれば其東京に在るは指を左の二老に屈さゝるを得ず

曰く春秋庵幹雄　曰く老鼠堂永機

幹雄は質、文に勝り其弊はやゝもすれば鄙俗に過ぐ、永機は文、質に勝り其弊はやゝもすれば伶俐に流る一は質をもつて勝り一は韻をもつて勝る一は豪情一は勝致

秋風や砂吹きつける肌いたし　幹雄

萩を捨て隣の椹杙萩の花　永機

永機が「萩の花」は已に帝國文學記者の批難するところ（帝國文學第十號雜報）となれり幹雄が「秋風」はいかに老人の肌のいたかりしかを憐れむのみ

近日舊派の俳諧者流が「寫實」をもつて句の要となし其詩境非詩境をわかたず一途現實に走るの傾あるが如し

枕さげて二階にあがる蚤ぎらひ

何の名をつけてやらうぞ草の花

一は駿遠に一は北越に宗匠として雄を稱するものゝ句なりと聞けり露骨の甚しきものにあらずや

然れどもこれその極端なる例を舉げしなり若夫れ其佳なるものゝ外に幹雄永機が今の佳なるものを選めば素より其老成なる散花片々枚舉に暇あらざるべし

以上は風調に就きて小評を試みしもの然れども若夫れ兩個が平生を見れば亦又其特色を覗ふに足るべきものあり

幹雄が明倫社中は拙を以て勝れり普く全國に星布して平民を味方となす永機が晉派連中は質を以て勝り多くは社會の上流に味方を有す其風（渡邊昇）素水（岩村通俊）鳳羽（森山茂）若は因州梅幸の徒皆なこれに結ばざるはなし

幹雄に門弟松江あり永機に門弟機一ありこの兩者も著しく其派の特色を顯はし前者は平民的にして後者は貴族的なり

一方は明倫雜誌を機關とし一方は楊山寄贊(十一月創刊の筈)を機關とすべしこの兩雜誌を比較せば亦又特色をあらはす著しきものあるべし

而して此二派各又一個の有望なる青年俳客を有す二派の將來における望はこゝに繋がるべし

春秋庵中にありては　安藤和風

阿心庵中にありては　晉　雪人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

和風が句は二十五六年の交の雜誌「日本人」に散見す當時和風にして專ら之に任ずるところあらば直ちに正岡子規と相對壘すべかりしなり半途にして秋田に退き都下に於る相當なる俳壇を有さゞるがため其名は遂に忘却されにき聞く今猶秋田にありて平生吟咏を絶たずと其出身は商業學校なりと聞けり

雪人は現に芝公園阿心菴中に閑居し既に業俳を以て任ず遊歷兩三年風交 隨て 廣し其出身は慶應義塾なり

一は商業學校一は慶應義塾より俳人の出しを怪むなかれ 即是平民的文學の特色を表ししものにして殊に業俳としては一種の營業的なるに注意せざるべからず

此兩個が伎倆は今日之を論ずるは早きに失すべし然れども和風にして雪人のなしゝ如く專ら業俳をもつて立たば春秋菴の新勢力を加ふる雪人の晋派に於ける如くなるべし然れども和風の意「業俳」にあらずとせば和風が明治の新俳壇に於る位置は却て雪人の上に出づべき歟和風なる者彼の往時の松露菴に於る烏明たるを喜ぶべき乎將た白雄たるを甘んずる乎

雪人に於る風聞は已に蓼太たる事風聞記に掲げしところなり

幹雄永機が對照は略ぼ斯の如し一事猶列擧せば

幹雄は芭蕉を神とし奉じ永機は芭蕉を佛の如く崇む共に財錢を索むるは一なるべし（但し予は業俳者がこの所爲を非難するものにあらず）

芭蕉二百年紀に於る兩個がなせしところを見よ幹雄は深川に廟社を造營せり全國よりこれがため寄進せし金員は千六百二十八圓八十二錢六厘（明倫雜誌百五十二號社告參照） 永機はその前年取越して全國諸家の聯句をつくり奥羽北陸を四ヶ月間漫遊し義仲寺に佛事を營めり此遊歷に收めし金員は幹雄が得たるところの三ヶ一に足らずと風聞す然るときは其額凡そ五百圓內外なるべし

近今業俳者が收入せし金員の多額なるものは此二者が得たるところのものなるべし兩個が舊派の俳壇に於ける勢力は亦其一斑を覗ひ知るべき也

兩者が評論はこゝに暫く筆を收め此以外に東京に於る舊派俳諧者流の優なる者を索むれば

桂花園桂花あり　菫菴愛海あり

桂花は元來俳諧に衣食なす者にあらず且つ「古今沿革雜記」六百四十卷の大著に從事し今や將に成就せんとして其社中の

月次一回の外は一切俳諧の交を謝し著述に餘念なし其見識尋常俳諧者流の卑俗なるが如くならず

愛海は連俳を以て推さるゝ老俳なりと聞ゆ其他女俳には　採花女あり亦老成の名あり

金羅が白雲社中は金羅没後漸く振はず、梅年が雪中派は曉太の昔時に似るべくもなし

更に全國に就きて一瞥すれば寥々として亦晨天の星の如し曾て文化年間製するところの年代記を見る中間日本國圖を畫き其國々の名俳を國別に配入せしものあり而して當時各國皆な二三の名俳を有せざるはなく就中京都大阪名古屋仙臺信州加賀の如き其人頗る多く當時全國俳諧の振盛を想見せしが今や更に聞くところなし僅に指を左の二三に屈す

京都　聴秋　浪花　南齢

名古屋　羽洌

而して老俳をもつて稱すべきは出雲に曲川あり秋田に吟風あり吟風の力は曲川に如かざるべしと雖も其俳客たる品格に於ては吟風の如きは今日の俳壇に稀れに見るの長者なるべし躬に俳諧を行ふものといふべき乎と

斯の如き地方に名俳の乏しきをもつて舊派の勢力衰耗せりといふべからず畢竟舊派に屬する俳客は名俳を要むるものにあらず宗匠としいへば盡く尊敬すべき者なるを知るや而して今日宗匠と稱するものゝ多き昔時に倍す蓋し益々平民的普及のいたすところなるべき也況んや交通の便開けし今日に於ては集冊の點は直ちに之を東京に請ふも可なり俳諧の附句は往復はがきを用ふるの便あり俳諧も亦た頗る中央集權の影響を蒙りたるものあるが如し

所謂舊派に算入すべきもの其數幾十万ぞ、社中の多き幾万ぞ、宗匠の多き亦幾千ぞ而して屈指すれば寥々此數者にすぎずこれ甚だ觀察の粗に過ぎたるの故なるべしと雖も然れども之を群にするも到底新派の生命あり光彩あるに及ばず彼の大多數をもつてこの小數者に及ばず憐むべきものありと雖も然れども一面彼の平民的なる方より觀察すれば斯の如き亦又要るに足らずとなすも知るべからざる也

一、所謂新派なる者

余は平民的といへる方面より觀察するの前所謂新派なるものに就き一言すべし新派に就きてのやゝ鮮なる記事は俳諧風聞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

記にゆづり其要を摘めば明治の俳諧は
「硯友社の談林派を前驅とし日本派に復興し而して現今新舊調和派を出し調和派は連俳をもつて日本派の非連俳に對してこゝに本年秋季の俳壇は連俳新興の時運」
を起すべしといへり

而して此言をなす未だ若干ならず忽ち三箇の異象は起れり

一は秋聲會の發企なり予は秋聲會の席に列せしものなりといへども此處に同會を代表して立言するものにあらず然れども會の主趣は風調の新舊門派の異同を問はずといへり 即 是舊派調和派新派若くは連俳派非連俳派各その長じし所ろを以て會同を望むものなりといふ角田竹冷戸川殘花主として之を發企すこれ所謂新舊調和派の一層更に大なるものなりとす

二は子規か鄕里にありて其俳友との連俳「秋の城」一卷を公にせしとなり（參照十月十三日日本養痾雜記）連俳非文學の主唱者にして之を成す頗る異象なり其末文に曰く

「近頃新俳諧派といふ者起らんとすとか聞けりされどわれのは去る新派にあらず矢張り或人の所謂「古き夜明のけしき」なり」

と蓋し風聞記以後の作たるは知るべし抑も亦例の一格に偏せざる底の變化の才を試みんとせしもの乎この「夜明の景色」は他日別に風聞を待つべき也

三は各新聞が發句の外に漸く連俳を掲げんとする傾向なり「毎日新聞」は勿論讀賣新聞の「俳諧舶來もの」「繪入日報」演劇に係る歌仙半卷「やまと新聞」が採菊が觀月の連句等而して此等の選が多く「軍事」とか「舶來品」とか「劇場」とかの結びあるを採錄せしは未だ連句を嗜まざるものにその興味を與へんとするの方便に在る猶彼の詼諧諷刺の發句が人の嗜味を加へし如くせんとするにある乎想ふにこの趨勢は來年の初めに至らば所謂「新連俳」の新なるを見るを得べき乎

兎に角に明治の俳壇は連俳復興の時代到來なしぬこれ予が風聞記に記せしに因れりとはいはず予は只だ風聞につき斯くなるべしと記せしに過ぎざりし也。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

爛　煥

愛笛を惜むの詞

悠々子

嗚呼愛笛よ愛笛よ今は何處に行きつるぞ、御身と吾との締交は一朝燕遊の中ならず、其關係を追想するは、即ち是我生涯の歴史を繰返すに異ならず、御身は既往十年間、實に吾が莫逆の友なりき、喜ばしき時に吾を祝し、悲しき時に吾を慰め、樂しき時に吾を戒め、苦しき時に吾を勞わり、有りとあらゆる境遇に於て、暫しも吾を離るゝとなく成功にも失敗にも、得意の朝も失望の夕も終始一徹、吾を勵まし吾を慰め玉ひしは、實に是れ御身の外になし、

回顧すれば余が十三才の頃なりき、父に從ひて住み馴れし故郷を去り、北越の客に旅立ちせんとなせる時、余を兒のごとく愛し玉へる一教師は、余に向ひて言ひ玉はく「何物にても欲しき物を餞にせんほどに、遠慮なく言ひ出でよ」と、余は日夜愛師の家に出入して、彼れが凡ての什器を知れり、そが中に余には欲しき物いと多かりき、されど、余は多くの貴き珍らしき又た高價なる品物の代りに、只た一管の御身を撰べり、御身は愛師が凡ての財寶よりも、余に取りては貴き價値の品にてありき、實に余は當時御身を得て、恰かも全世界を得たらんが如き滿足を感じたりき、思へば當時御身の外現の美はしかりしよ、御身が虎斑の竹身は玉のごとくに輝きぬ、その玲瓏たる音聲は、天使の歌唄の奏樂の如くに響き亘りぬ、爾來悠々十星霜、春は來り秋は去り、吾身の境遇も年毎に變り行けど、御身と吾との友情は、年經る毎に温になれり、嘸ぞや御身も記臆しつらん、偶ま珍客の來り玉ひて、父の酒宴を張り玉ふ時、幼なき吾と美しき御身は、屢々父の召によりて、其席に侍せしめられぬ、父は先づ「今様」を余に命じ玉ふを常とせり、余が御身を弄すれば、愛する妹は優しき聲もて之に和し、一種靈妙の奏樂は、陶然主客の心を醉はしめ、取る杯を措くの遑なからしめしと幾度ぞや、想へば當時吾が心の純潔にして無邪氣なりしとよ、余は父の微笑と、客の稱贊とを博するを以て無上の光榮と思ひたりき。

星移り歲改まり、時勢は進み人事は動き、老たる父の硬骨は漸く浮薄なる世に容れられずなりぬ、初めより裕かならざりし我が一家は、次第に窮乏の度を增しぬ、余が敬愛する只一人の兄は、毅然笈を負ふて東都に上り玉ひしも、固より學資の出處なければ、或は學僕に或は食客に、粒々辛苦、慘澹淋漓、具さに貧生の生涯を送り玉ひ、以て茫然學海に棹し玉へり、去れば余も亦我が力の及ぶ限り、斷然學資を家に仰がじと、堅く心に定めしに、余が十五才の時なりき、或は暑中休暇には、多くの學友が雀躍して歸省の途に就くにも係らず、余は地券調査の受負者に傭はれて田舍に至り、あたら愉快なる二ヶ月間の休暇をば、焼が如き炎天の下に田畠測量の手傳をなし、或は時々寫字の筆を執り、僅かに數圓の報酬を得て、以て來期の月謝に充てしと一回のみにあらざりき、放蕩無賴なる余が傭主は、余を待すること頗る苛酷なりき、余は轉た我身の不遇を歎ぜり、かくて余は山間の僻村に苦役して、語るに友なく、慰むるに師なき、寂しき休暇を送りし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時も、御身は獨り吾を見捨てず、常に慰め勵まし玉ひき。僅かに少時の暇を偸みて獨り屋後の谿間に入り、岩間にむせぶ谷川の傍に、優然御身を弄すれば、水聲松風之に和し、樹間の小鳥さへ時に吾等の奏樂に加はりて、変に言ひ難きの美曲を奏し、憂思一掃、胸懷潤如として、猛志再び天を衝くに至れると屢々なりき、或は秋夜月を踏んで林間を彷徨し、或は嚴冬雪を蹴て涙濤に嘯くの時、御身は常に我同伴の友なりき。

斯くて余が在校の生涯は、二年の間夜學校に兒童を敎へ、一年の間洋人に日本語を授け、二年の間書籍館の事務を執り、半ば敎師の如く半ば使丁の如く、半ば家計を助け、半ば學資を自給しつゝ、苦學五年、辛じて其業を卒ふるを得たり、其間吾御身に負ふ所ろ、それ果して幾何ぞや、啻に是のみにあらざるなり、御身は實に戀の苦しみに吾を救へり「戀すとは誰が名付けゝんとならん死ぬとぞ只に言べかりける」とは古人の名歌なりと聞く、實に忍ぶ戀の苦しさほど世に切なるはなし、況んや吾が幼時より戀愛に對して懷ける感想は、頗る嚴格なるものなりしに於てをや、吾は思へり、學生にして戀愛を抱くは、即ち罪を犯すなり、彼の墮落も亦是に至つて極れるなりと、余はしかく敎へられ、亦しかく信じて疑はざりき、然るに怪しむべし、余は一朝憐むべき境遇に於て自らを發見せしなり、余は如何にして、斯く脆くもビナスの神の前に跪くに至れるやを知らず、只如何せん、余は恰も一種の電氣に擊たれたるが如くに彼女の魔力におそはれて、我靈は、如何にしても、意中の小女の靈と結合せずんは止まざる如くに活動するを自覺しぬ、嗚呼余は果して罪を犯しつゝあるか、我は墮落の人となりしか、思を沈めて自ら省みるに我心は一點の汚情あるなく又一毫の私慾あるを見ず、かく見ゆるは必竟我心の眼の曇りしによるか、自ら潔白なりと思ふは、即ち大に不潔に陷りたるの證にはあらざるか、余自ら己が心の状を知らず、誰れか之を指導するものぞ、余は迷へり疑へり、天上天下殆んど孤立の身とはなりぬ、かくて余は學ぶべきの人もなく、五里霧中に彷徨しつゝも、猶ほよく凡ての思を知り玉ふ天地の神に對しては、實に誠心を以て祈ることを得たるぞ嬉しき、余は此純潔なる思をば、憚る處なく神の前に告白し、毫も心にいやましき處あるを感ずる能はざりき、されば余は未だ罪人にあらざるが如し、未だ墮落の子にあらざるが如し、莫遮、余が彼女に對するの思ひは益純潔に益強大に成長しつゝあるなり、嗚呼此の一片の思ひ、如何にして意中の人に通ぜん、落花情あるも流水果して心ありや否や、彼女は時として既に我心を知れるがごとくに見ゆることあるも、又時としては更らに我意を解せざるものゝ如し、知れるが如く見ゆるは、我慾目か、知らざるが如く見ゆるは我疑心か、心を決して言ひ出んか好機なきを如何せん、情を殺して默せんか、燃ゆる思を如何せん、言ふて恥を取るは千歳の遺憾、默して機會を失ふは死するにまさる恨事なり、之を奈何せん之を奈何せん、思ふて此に至る、丈夫の心膓亂れて麻の如く、四面暗澹、殆んど適之する所を知らず、父母も以て我か心を慰むるに足らず、心友も以て憂を分つに足らず、獨り自ら苦悶して、万斛の涙を眼底に秘するもの一星霜、此の時に當りて嗚呼此の耐へ難き戀の苦しみに於て獨り能く我心の秘

密を知り、我衷情を同察して滿腔の同情を表したるは、實に只だ御身の在りしのみ。當時余は我校の書籍室の係員として、放課後常に校舍の一室に日を送れり、而して御身は常に架上の一隅に在りき、實に余は獨り御身によりて、僅かに滿腔の憂思をやりぬ、夕陽西海に沒せんとし、彩雲斜めに東山に棚引くの頃、余は耐へ難きの思に迫りて、頻りに戀人の俤を想像し吾と我身を忘れつゝ、呆然として室內を步行しては又も自ら心付きて、俄然我意志の弱きを罵り「咄、汝何物の痴僕ぞ、汝未だ一寒生の境遇にありて、みだりに戀愛に思を焦す、如何にして他日の大業を成さんとするか、時未だ至らず汝それ之を思へ」と自ら穩ち自ら刺戟し辛じて、暫時の安きを得たると果して日に幾度なりしよ、「嗚呼神よ爾は悉く吾が此の思を知る、若し聖旨に適はゞ彼女を吾に與へ玉へ、然れど我意の儘を行はんとするにはあらず、聖旨の儘になし玉へ」とは當時我が暗室の中に端坐して、號哭天に訴へたるの祈りなりき、斯くて一は滿腔の大望心により、一は赤子の如き信仰の念によりて、我か此の思を制服せり、然り大望心と、信仰とは消極的には充分の力ありき、されど此の苦しむべき試煉の時に於て、積極的に我を慰め、失望の中に希望を與へ、憂鬱の中に快濶を與へ、　て大に我勇氣を鼓舞し、我氣力を維持したるは、只だ――――然り只だ――――御身の在りしによる、御身なかりせば、余は或は大望心と信仰とに對し、生涯一種の敵意を抱くに至りしやも計るべからず、御身なかりせば、余は或は繼子の如くに、ねぢゆがみたる性情を有するに至れるやも知るべからず、御身なかりせば、少なくとも余は沈鬱憂苦の人となりしやも知るべからず、今や幸にして御身が慰藉と奬勵とは、一時の催眠劑となり果つるとなく、彼女は天の聖旨によりて、我か將來の妻と定められ、悲喜哀樂を別つべき、世界唯一の良友とはなりぬ、夢のごとく幻のごとき當時の境遇を追懷し、我が今日の幸福を思ふ毎に、滿腔の感謝は御身に向つて捧げざらんと欲するも得んや、然るを何等の天意ぞや、月に叢雲花に風、滿つる潮はひく時あり。意中の人を得て喜ぶの時は、御身を失なひて悲しむの時ならんとは、苦みを共にせる御身は、樂しみを共にすべきのときに去つてまた在らず、嗚呼これを想ふ毎に余が哀惜の情何ぞ堪へ得んや、嗚呼愛笛よ愛笛よ今は何處に行きつるぞ。』

指を屈すれば早や三年の昔とはなりぬ、我が學生の生涯を去りて、猛然商海に身を投したる以來、御身と我の恩愛は、更に一層深くなりぬ、我邦商業界の腐敗を歎き、身自ら眞正商人の模範たらんとは、余か初めよりの素志なりき、正直は最良の方便にして、正義は最後の取勝者なりとは、余が初めよりの確信なりき、博愛慈善の大主義の下に世の憐むべきものの友たらんとは、余が初めよりの希望なりき、かくて余は資本もなく經驗もなく、只だ胸間一片の確信を抱きて、斷然實業界の新生涯に入りぬ、憐むべし商界の腐敗は余が預想に倍蓰せるを見たり、正直の人常に他人の欺く所となるを見たり、競爭場裏の取勝者は必ずしも正義の人にあらざるを見たり、博愛慈善の實業家は多くは巨富を成し能はざるを見たり、我素志、我が確信、我希望、果して是れ空中の樓閣たらざるを得るか、吾が理想は全然實際と背馳せり、爭鬪は日夜吾が心

に起れり、平和なる我か胸懷は宛然修羅の巷となりぬ、加之、失策は屢々其度を重ねぬ、失敗又失敗、小心翼々として日夜に過なからんことを是れ務むると雖とも、冷淡なる熟練は、忽ちにして來り助けず、薄情なる經驗は期日にして我か門に降らず、當時余は一小册を購ひ名付けて「失敗錄」となし日夜之れを座右に置きて、失敗の都度其顚末を之に錄し以て警戒の資となしぬ、一葉又一葉月餘にして册子又た餘白なし傭主は幾度か余を解雇せんと決し、余も亦た幾度か足の塵を拂つて商界を脫せんと決しぬ、嗚呼是れ實に我生涯中の最暗時代なりき、余は未だ斯の如き逆境に遭遇せしとなかりき、回顧悠々前途茫々、何れの時か吾が志を得るの日ぞ、徒らに任重くして道益々遠し、憤慨胸に迫りて、熱淚禁じ難し「雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前」余は將に失望の淵に臨み、落膽の谷に陷らんとせり、況んや商界の俗臭は漸次に我か衣襟に感染し、我頭腦の大部は將に俗界の思想を以て充ちんとし、雅量日に月に失せて、心靈の生命、旦夕に迫るを覺ゆるをや。

想ひ起す、當時余は終日の劇務に疲れ、元氣消耗し身躰衰憊し、日夕獨り屋上の冷臺に仰臥して、空しく蒼天の星を數へしと幾度ぞや、而して當時御身は實に我傍を離れざりき、憂思交々來り襲ひ、憤慨殆んど禁し難きの時、試みに御身を取つて一曲を奏すれば、天籟忽ちにして心に充ち、聖訓沛然として天の一方より來るを覺へき、然り當時余は好んで「月と花」の曲を奏し、又た百三十五番の讚美歌を愛吹しぬ、「キリストのみにあるべきか、否な世は誰れも十字架あり」如何に悠邃端嚴なる御身の美聲は、言ひ難きの慰さめを余に與へしぞ、如何に高尙優美なる御身の音調は、乾渇ける靈を潤せしぞ、恰かも一陣の淸風の如く、また旱天の驟雨の如く、爽然として滿身の煩惱を吹掃し去り飄然として身自から仙界に遊ぶの思あらしめき、當時御身にしてなかりせば、余は全然俗物となり、無風流漢と化し、天與の美術眼は汚塵の爲めに遮られ、天地間の「美」の女神は全く我心の戶を閉ぢて、亦彼女を見る能はざらしめしやも計り難し、思へば御身は、啻に我事業上の助力者のみならず、實に我心盤上の導師なりしよ。」

堅忍克苦の功、年を逐ふてあらはれ、余は亦た昔日の余にあらず、余が理想は漸次に目前に實行せられつゝあり、吾が素志は着々其步を進めつゝあり、前途稍や光明、地位亦次第に上進し來ぬ、而して今や亦た御身なし、嗚呼愛笛よ愛笛よ今は何處に行きつるぞ。」

去年の秋、余は知友と共に江の島の月を賞せし時、御身も實に同伴の友たりき、今年の夏敎友數輩と舟を松島の水に浮べ豪遊快哉を呼びし時、御身は實に同伴中の寵兒たりき、余が御身を採つて吹唱すれば敎友之に和して合奏し、靈音遠く波上に浮びて舟遊自ら一種の妙味を加へぬ。

嗚呼愛笛よ愛笛よ、御身が慰藉の德行は、啻に我一身にとゞまらざりき、御身は幾度か病床の友を喜ばしめ、幾度か離別の行を壯にし、幾度か悲慘の家族を樂しましめ、幾度か鄕思の孤客を慰さめぬ、然り實に御身は此の聖職のために殉せし

ぞ悲しき、我か親戚に困難の事起りしを聞き、余は劇務を繰合せて、彼等の相談に預からんが爲め、遠く東北の天に赴きし時御身は例の如く余に伴ひ玉ひぬ、然り悲憂に沈む彼等を慰むる一助ともならんと。

嗟吁余は言ふに忍びざるなり、余が停車場に着するや、急きて車を雇ひ彼等が家に馳せぬ、而して御身は、――寵愛する御身は在らざりき。

恐くは御身は雜沓せる停車場内に遺されて、頑是なき市井の兒童に拾はれしか、若くは野賤なる車夫馬丁の魔の手に落しか、幸にして有情の君子の温懷に收められ、可憐の淑女の玉掌に撫られて、御身と吾との關係にもさも似たる、多幸の生涯を送らんには、失ひし我身の苦しみは、御身が此後の幸によりて、聊か慰めん術もあるなれど、思へば定めなき浮世かな、昨日までの竹馬の友は、今日は別れて行衞も知れず、あはれ新しき御身が持主は、何如なる心もて今や御身を翫むらん。」

想へば思へば口惜し、殘念の事してけりと、幾度獨り口說きても、甲斐なきは御身の歸へり來ぬとなり、今は嘆かじ、かこたまじ、何とか意氣地なき女子の如くに、こぼせる水を汲まんとはする、我も一個の丈夫なり、何ぞ一笛の爲めに貴き涙泉を涸らさんやと、悟り顏に明らめては見れど、偖て堪へ難きは同じ心の思ひなり、余は幾度か我の此の不幸を多くの友人に語りぬ、如何に彼等の冷淡なるよ、彼等は我情の万一をも味へ知らぬなり、彼等は猶ほ良き笛を、余の爲めに購ひて贈らんと慰めぬ、嗚呼彼等の厚意は謝すべし、然れど如何せん、假令ひ百金の價高き古笛にても、絕妙の美音を奏する名管にても余に取りては、御身が半をも價せぬを、世には美はしきも貴きも數あれば、價によりては、意の如くに、求め得べけれど、千万金をなげうちても、購ひ得ぬは、御身と吾との友情にぞある、御身が價値は其外貌の美なるにもあらず、其音聲の優れたるにもあらず、只だ余が御身に對して抱ける無限の友情にぞある、嗚呼余は新笛を求めざるべし、むしろは成し得べくんば、音樂の趣味を忘れ果てなん、繼妻を娶るは余の到底爲し得べくも覺えぬところなれば。

浮沈定めぬ、世の仇浪に十年の星霜一日の如く、具さに苦樂を倶にせる我益友よ愛笛よ、いまは何處に行きつるぞ、吾に天地の美を敎へ、吾に快濶の性を與へ、吾に事業の快味を與へ、吾に今日の位地を與へたる我教育者なる愛笛よ、今は何處に行きつるぞ、御身とはなれて如何に余は、獨り苦海に掉さん、御身と別れて如何に余は、獨り山路を辿り行かん、今日もうき身にまとひ、集り來る世の煩ひに、心も躰も疲れ果て、漸く我家に歸り來りて、先づ一曲をと架上を見れば、嗟吁愛笛よ愛笛よ、御身は在らず恍惚明滅。我が慰めの天使は去れり、如何にして憂世を渡らん、我が生涯の半部は失せたり、如何にして將來の歷史を描かん、嗚呼我友よ我半身よ、せめては夢にだに來りて、今一度び我唇に接吻せよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

最初の外來女宣教師が日本傳道昔語

今を去ること二十六年以前今の盛岡在留宣教師ミラー氏の夫人は、當時未婚婦の宣教師として、初めて日本に渡航せられ、故ブラウン博士に從ひて、新潟に赴かれしが、其途次、及び滞留中の出來事の昔語りは、載せて近刊のジャパン、エバンゼリスト第二卷第六號に在り。今其大略を摘譯して今昔の感に供ふ。詳細は原文に就いて見るべし、興味頗る多きを覺えん。

一千八百六十九年の夏、故博士ブラウン氏が日本政府の囑を受けて新潟英學校教師として赴任せられんとして、妻氏を伴ひ、紐育府を發し、其一ヶ月前に始めて開通となりたりし、太平鐵道によりて、再び日本國に航せんとせし時なりき。此時レフォムド教會外國傳道會社は、一人の未婚婦傳道者を日本に送りて、其成否を試驗せんと決し、其撰に當りたるものは、即ち妾（今のミラー夫人）なりき。妾はブラウン氏に伴はれ、一行は太平洋航海滊船オレゴニアン、即ち今の名古屋丸に搭じて、其年八月二十七日横濱に着したり。當年の横濱は、今日の如く繁華盛大なる都會にてはなく、居留外人の宣教師は、僅にヘボン博士夫妻、ゴーブル氏夫妻、の數人に過ぎざりき。妾等の一行はオル、モンド氏に招かれ、其山手一番の居宅に寄寓して、政府より新潟に出發すべき指令の下る日を待ちつゝありしが、當時の日本人は未だ「時は金なり」との金言を曉り得ざりし故、遷延日を彌りて、やうやく十月六日の朝に指令を受けたり。一行は馬車にて品川に着せしが、道すがら美しき松杉の樹陰には、數多の乞食等群をなして、妾等一行を見かけて「天保進上、天保進上」と呼ばゝりゐたりき。

品川に着するや、三丁の本篭は既に備へられて、妾等の一行を待ち、太刀を腰に横たへたる九人の侍は、護衛として、既に其傍に在り。各二人は三丁の篭の兩傍に侍し、餘の三人は、荷物を警護せり。一行の江戸市街を離るゝや、一人の先き拂ひ、其の前驅をなして、「下におろう、下におろう」と高聲に呼ばゝり、山を過ぐるときも、野を過ぐるときも、人家の在る處にてもなき處にても、之に遇いたる人は一行の過ぐるまで、土下坐して、見送りたり。この敬禮は妾等が外人にてあるが爲にあらず、無論幕府の役人つきそひ、お上の旗じるしを立てたる行列なればなりき。しかも護衛の人々は「お侍ひ」なりければ、人民は之に下坐すべき筈にてありき。江戸より新潟に至るまでは、十六日間を費し、十時間毎、三時間毎、及び晝時飯の休處と、夜の宿泊處とは、先き觸れにて定まり居たりければ、何處に着くも、待受は万事旣に整ひ居たりき。

江戸を發して後の、第一の晝休場は板橋にて、此邊迄は騎馬の士一人護衛の爲に付き添ひ居りしが、其後は九人の徒士侍のみ護衛なしたりき。初めての夜は大宮に泊し、翌日の晝は鴻巣、其夜は熊谷泊り又、其翌日は晝は本所、夜は高崎泊りにてありき。如此く一行は恐半分の悠長なる旅行をなしたり。他に望みもなくてあらば、如此實に理想の旅行にてあらめ、自ら掛念をなすにも及ばれば、何の支度をなすにも及ばず、人足と談判するの必要もなければ、金を支拂ふの煩ひもなし。道々の景色は美麗にして、かてゝくはへて旅行は大方は天氣、たま〳〵雨降る日には、宿屋にて絹製の枕を友として、荷物を錯き、または僅に覺えたる日本語を繰返して樂しみとしたりき。籠の中にてもブラウン博士より教へられたる、『私は歩きたい、私は歩きたい』といふ短語を稽古して、傍なる侍に之を話なせば侍はケゲンナ顔して英語を話し居るとのやうに聞きゐたりき。

都會に着く時も、村に着するときも、初見のものが待受け居りて、一行の着するを認むるや、馳せて土地の役人に上申すれば、役人共は上下にて出で迎て、一行に列びて、下坐し、恭しく敬禮をなしたる後に、一行を休泊處へ案内し、去る時にも役人は前と同樣の敬禮をなして見送りたり。外國婦人が田舍を旅行するとは、日本開闢以來初めての事なれば、妾等一行は不思議なる見物となりぬ。宿の本陣に入れば、ブラウン博士は前座敷に座し、妾等婦人は最も奥まりたる座敷に入るとなれど、何の物音もせずと安心する程もあらせず、障子の隙より夥多の眼が列をなして、窺き込み居たりけり。旅行に出でたる後に、間もなく妾は人の尊敬を受くる爲に、ブラウン氏夫妻に直接の關係あるものとするが必要となりて、ブラウン氏の娘と名乘り、新潟にありし間其儘にて過したりき。

信州長野に着せし時、市街には人民妾等の一行を見んが爲に黑山を築き居り、中

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

には二十里餘の遠方より態々出で掛けたるものもありしとかや。其顯朝護衛の士は我等に本陣より町はづれまで徒歩し、人民の見物となりて、彼等をして滿足せしめずやと勸むるものから其意に從ひ、二万人以上の人民が道の兩側に靜謐を守りて詰まつてある中を分けて町を徒歩したり。

新潟に安着して町はづれの日本家に住ひ、横濱よりクックを雇ひ入れて、樂しき一家を携へけるが、毎日の來訪者は幾限りもなき故、ブラウン博士の不在中は門を鎖して勉強しつゝありき。時として門前には人々群集をなして、門のひらくを待ちて入らんとせるもありたり。午後博士歸宅せば、門を開いて、人の入來を許すとせしが、中には數里の遠方より、態々外人と異様なる住居とを見んとて尚に來るものさへありし程なりき。五十人以上百人以上の來訪者あるとは日々通常にて、妻等は午後は全く人の見せ物となりて、此時にて、いつも僅に覺え初めたる日本語を使用せざるべからざることにてありき。又一人の目付は何時も我等の動作を看守し、また數人の役人は我等の家の一門に從ひて我等を警衛したりき。

ブラウン博士は三年の約定にて新潟に赴任せんとしけしが、僅に八ヶ月を過ぎたる後、新潟にては博士に[illegible]なくなりたるとて、博士を解雇し、中央政府は博士に横濱に移らんことを要求したりき。[illegible]るは實博士が日曜日聖書を教へたりしに基づき、[illegible]の代官は之を不可なりとしたるが爲に妨害を設けたるの口實なりけり。新潟滞在僅に八ヶ月にして、博士夫妻及妻は失望たくならずして、又を去ることとなりしが、此時は既に日本政府は行政機關を改めたる後にて、此度の旅路には先觸ひなるものもなかりて、護衛の士も僅に四人のみとなり、九日にして横濱に着したりき、此時は恰も舊日本を辭して新日本に入るの思ひをなし、横濱に歸る恰もニューヨーク街に入るの感ありき。

⊙高等女學校令發の時期　と題せし次前號の本誌に見ゆ、大日本教育會雜誌本月發兌の分にも亦曰へらく、尋常中學校に對比すべきものにして從來其の設置を見ること少かりし高等女學校も近時漸く新設の計畫開くに至れり。今ま設置の計畫中なりと云ふ地方は、愛知縣、宮城縣、奈良縣、茨城縣、鳥取縣、山形縣、群馬縣、北海道等なりと云ふ、と。

⊙女性作家　を論ずる「國光」記者の曰く彼等の物與は大に制限的注視を提せり。花園女史、小金井喜美子、若松賤子等の老腕者は言はずともあれ、樋口一葉、北田薄氷、田中夕風等の女史、作家として皆な紅葉門下に集り稍や氣焔を吐く、快に喜ぶべきに似たりと。

⊙日本女流の文學　として紫式部の源語を、山梨日々新聞に論じたる蹈鞴舍は曰く、アヽ彼式部は何者ぞ、千古に亙りて生氣ありとは、これ源語の謂なるかと。

⊙通俗佛教婦人論　は通俗佛教新聞に連載せらる。第二に云く、佛教にて女子を賤斥せるなどとは飛でもなき了簡違ひの話と言はればなりませぬと。

⊙日本當世之畫家　今度博覽會美術出品中、賞を以て褒狀を受たる者は同中僅に左の三氏。

大沼　[illegible]　　市川　塔南　　西野入公涼

⊙千衣製裟縫施供勸進の疏　は目白僧園の釋雲照律師が此度び發願施行せらるゝものにて、有志婦人は要めて千衣の製裟をつくり、肉妻禁戒護持以上の緇徒に供養せんとす。之を裁縫せむとするものは、初日に八齋戒、十善戒を受持し、眞言陀羅尼等を誦ひながら從事すべき定めのよし。

⊙家庭詩人　「基督教青年」の一投生、賴山陽を詩評して、愛の詩人として曰く、山陽は未だ曾て家庭を務等の間に忘れざりき、氏は家庭愛の人なり、氏は家を離れて久しく異境に寄たるに於て數々其不幸を咨嗟したり、氏は家庭ほど許きものは天下になしといふの人也と。

⊙髮の結方に制限を設けよ　と東京經濟雜誌の月旦子は言へり。云く、東京の下女が夜會結びを爲すは何となく僭越の如き心地すと。

⊙婦人の傳道事業　と題して、南越の飛龍子は佛教主義の反省會雜誌に於て論ずらく、傳道は寧ろ婦人の天任なりと、佛界大勢の變移事に指さすが如し。

⊙女教師の利害得失　を比較して、遂に師範校女子部廢止の流行は今年は來るとなかれと決論せるは、教育時論なり。

⊙賢藥を廢とす　賢藥を衛生上の公敵なりとして議會に請願するの發起を爲し此頃先づ天下に廣告するものは、日本衛生新聞社なり。

⊙海江田氏妹棠　は隆盛有村[illegible]氏の未亡人なり、近世史に名ある近衛家の老女村岡と交あつく猛烈の女丈夫と聞えしが、去二月逝去せられたり。

⊙婦人共愛會　頌榮女學校生徒の組織せる同會にては、去十七日、神田青年會館に於て、慈善音樂會を催したり。貧民不就學の兒女を教育する目的の爲めにせらるゝ也。

⊙岩崎久彌氏の妹　雅子（十四歳）は學術修業の爲め英京ロンドンへ洋行す。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

毎日新聞改良廣告

戦局收りて人心鬱し平和成りて國人喜ばず是れ志士仁人が人心を振勵して社會を刷新すべき時機にあらずや我毎日新聞大に此に感ずるあり**十月六日**以後紙面を改良し記者を增聘し專門名士の筆を藉りて經國の要務戰後の經濟一切の要報を網羅し光采陸離花あり實あり庶幾くは看客の望に副はんとを

露國事情　小西增太郎氏

列國均勢の一大原力にして地彊我に接す將來の東洋を知らんとせば首として『露國』を知らざる可からず筆者は多年彼地に留學して其事情に精通す露國の眞情實勢を知るゞ必ず是より初まらん

新田勢　戸川殘花氏

戀愛的小說にあらず又心理的小說にあらず無道の足利に仕へし姦吏を誅し正義勤王の軍を鎌倉に導ける勇士の義烈譚讀去讀來紙上風雷の聲を聞かん

二東三文 ふみ反古　本野杢阿彌氏

當代名家の手に成り一時はヤンヤの評判にて三版五版と賣出した著書も忽ち大道の露店に晒され哀れや二東三文の反古と伍を爲すに至るは何ぞや此のふみ反古は即ち名家の穴さがし學者の内幕正眞正銘うち出してドシ〱すッぱぬくものなり云々」是れ作者の宣言

名家の談話

名家の談話は廣く之を紹介し先づ**大隈伯**の時事談に始め續て諸名士の卓論に及ばん

『俳句』を募集す　選者　角田竹冷大人

『新躰詩』を募集す　選者　戸川殘花大人

看よ**十月六日**以後の毎日新聞を看よ

本紙定價壹枚壹錢五厘●一ヶ月前金三拾五錢●六ヶ月前金貳圓拾錢●東京及横濱市の外は別に郵税十三錢を申受く

京橋區尾張町　**毎日新聞社**

商標登錄出願中

●齒性の悪き人「山ざくら」半瓶を●

精良なる藥品のみを以て

製したる藥はみがき

●用ゐ給はゞ奇効忽ち顯るべし●

定價

山ざくら　大瓶入二十錢　小瓶入十五錢　桐箱入四十錢

四百餘州　袋入二錢

製造本舖　明治堂

東京神田區南神保町十七番地

販賣所

各地小間物店賣藥店等にあり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

校外 **邦語文學講義** 毎月三回八ノ日發行一冊紙數卅五字詰十四行八十頁以上●入學金五十錢月謝金四十錢半年前納二圓三十錢一年四圓五十錢別ニ郵稅不要○爲換ハ本校幹事宛ニテ牛込郵便支局ニ振込ベシ

邦語文學講義ハ本年一月ヨリ新ニ發刊セルモノ和漢洋三文學ノ精髓ヲ調和融會シ高義ニ謂フ文學思想ノ弘布ヲ目的トスルモノニシテ現今唯一ノ文學專門ノ講義錄也試ミニ其特質ノ一二ヲ舉ケンカ掲載スル諸講義ノ何レモ最新ノ學說ニ據リ廣ク先哲ノ所論ヲ參酌セシモノニシテ穩健ニシテ偏セス簡ニシテ悉ナルカ如キハ其一也評釋ニ一種ノ創新ノ法ヲ用ヒテ煩瑣ナル訓詁註釋ヲ避ケ直ニ三文學ノ精髓ヲ會セシメ傍ラ對照ノ妙味ヲ發揮スルカ如キハ其二也文章平明雅馴ニシテ難澁佶倔ノ文字ナク優ニ現時ノ普通文ノ摸範タルニ適シ文學講義ノ名ニ背カサルカ如キハ其三也其他購讀者ノ質疑ニ對シテハ鄭重縝密ナル解答ヲ與ヘ文學攷究ノ方法ヲ示サンカ爲ニハ「文學修業手引」ノ科ヲ設ケ參考科トシテハ內外博士學士ノ斬新ナル名論卓說ヲ臨時ニ掲載スルカ如キ本講義ノ用意ノ周到深切ニシテ普通ノ文學講義ト同一視スヘカラサル知ルべキ也來十月初旬ヲ以テ新ニ第一年級及第二年級各第一號ヲ發刊シ校外生ノ入學ヲ許

學科

一年級●日本文學史●論理學●哲學綱要●敎育學●英文學史●史學綱要●美辭學●和文評釋●英文評釋●漢文評釋◎二年級●日本文學史●論理學●哲學史●心理學●英文學史●文學綱要●支那文學史●和文評釋●英文評釋●漢文評釋◎三年級●哲學史●倫理學●獨文學史●印度哲學史●社會學●支那文學史●希臘文學史●羅馬文學史●佛文學史●英文評釋

講師

今井鐵太郎氏池谷一孝氏畠山健氏大西祝氏金子馬治氏立花銑三郎氏坪內雄藏氏坪井正五郎氏上田萬年氏增田藤之助氏藤代禎輔氏小屋保治氏後藤寅之助氏齋藤木氏齋藤阿具氏阪田曲治氏岸本能武太氏島村龍太郎氏元良勇次郎氏關根正直氏

規則摘要

校外文學科生ハ入學試驗不要●三年間講修後通信試驗及第者ニハ卒業證書ヲ與ヘ且准校友トス●毎年一回懸賞文ヲ募ル●詳細規則入用ノ向ハ通知次第送致ス●初號發刊十月八日●從來本校政法行科ノ校外生及ヒ校友ノ紹介又ハ各學校敎員ハ其證明アレハ東修ヲ免ス

東京牛込區早稲田

明治廿八年九月

私立 **東京專門學校**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

救世

第八號目次

明治廿八年十月十五日發兌
定價壹部金五錢
郵税不要

●表題　本多庸一
傳道　米國矯風會館の圖
救世軍を歡迎す
天高く氣清し　傳道子
矯風會を論ず　社說
禪の流行と傳道　參禪子
牧師と商賣　なには生
營口の面積。戸數。人口
基督教徒の家道　家庭子
蒙古の宗教事情
女宣教師イムホーム孃　高野外吉
近世外國傳道の父ウイリヤム、ケレー　林弘之
支那内地の道家
外國宣教師の新計畫　聖狂生
親鸞の傳道　聖狂生
晩餐の用意　博士モール
伊達政宗のローマ法王へ送りたる書翰　大東生
教外近況：：：：數十件及び星野光多。押川方義。平野はま。佐藤てつ。星野幸。嚴本善治。田川大吉郎。渡瀬常吉の諸氏を訪ふの記事文又村木氏の八王子教狀の詳細なる報知あり
「アイヌ」の宗教　北海漁夫
●教育　師弟の關係　北山人
教育私言　N.T.生
蒙古教育
地方と東京　熱街隱士
教育に關する雜誌
●文學　文學と文字　しのぶ
狀‥門白の川合翁……小平小雪子……青木政子……八田大人‥吉田樂上
醜譯小言　崑崙山人
新躰詩．：幽囚　鈴木こすゝ
ヘブライの聖詩第一章　木曾五郎
●評論　○基督教之礎○高野の光○傳燈○成田志林○國風○救世之光○教界評論○日本宗教○青山評論○安息日學校新聞○婦人新報○禁酒界○叢錦○澀宗○基督教青年○南海文學○駒込教界○救の音○慈善新報○九州基督教○道の栞○鎮西傳道月報○懺悔○比較宗教○窮窟○基督教新聞○我儘○剛氣○雜誌○集會○牧師○傳道者○始終○空想家○議論○北海之光○青年健全學○元老○救世軍
●附錄　說教．：基督生涯の謙遜　奥野昌綱
●廣告　廿數件

若しそれ救世軍の如何なるものかを詳知せんと欲せば本誌の第五號を讀むべし。又矯風會の如何なる運動なるかを知らんとせば本號を讀むべし。實に廣大なる方法。組織、運動なるを了知すべき也。

發行所　東京麴町區富士見町二丁目十八番地　救世社

●切拔通信の要旨

●全國の新聞紙無慮百數十種日々揭載する所の事項千差萬別世人の必す知らさるへからさるもの舉て數ふへからす然れとも全國の新聞紙を一集して盡く之を各自に通讀せんこと人事の繁多なる今日に在て容易に爲し得へきにあらす是本社の嘗て新聞切拔通信の業を創始し以て江湖必須の需めに應せんと欲する所以なり

●切拔通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨俱樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上に揭載の件は小說廣告に至るまて其委托に應し精閲選漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋釆女町廿壹番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

●切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は壹ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五十錢まで●一會社又は一團躰の全般に關する通信は壹ヶ月金五十錢より金一圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約とすることあるへし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は拾件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

圖書閱覽所廣告

日刊新聞十數種を始め文學宗教政治法律經濟農工商一般の諸雜誌二百種の外、新刊書類小說等及び西洋雜誌十數種を備付け廣く公衆の閱覽に供す
一口見料金一錢○十回以上割引あり○午前七時開場午後十時閉場○年中休日なし

神田區北神保町十九番地(順天求合社前向)
共立文庫　圖書閱覽所

(追白、本所は前に麴町區下六番町六番地第七號舍にありしを今回右の地に移轉一層擴張したるもの從前に比して規模頗る大)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

六版

鈴木弘恭大人講述

百人一首講義

百人一首の講義多かるうち、此書に及ぶはなしとて販路年々に擴まり、早く第六版を重ぬるに至れり、

一冊正價二十五錢、郵税四錢

東京下六番町　女學雜誌社

日本宗教

第三號　十月十日發兌

活火熱血……社説
井上正毅翁の俤を讀む……社説
宗教の性質を論じて佛教徒に望む……釋宗演
殺生戒論の批評を讀む……加藤弘之
形神論……巖本善治
死後の神道……柴田禮一
救世軍來……青柳猛
眞宗大意……廣幡貫一郎
社交に於るトルストイ伯……小西増太郎
早稻田伯に聞く……露伴と宗教を談ず
佛教因果說爭論○救世軍に對する評論○基督教會の腐化及獨立
○思潮數十派

一冊八錢郵税一錢○半年前金四十六錢

東京下六番町六番地　日本宗教發賣所

本社出版書籍

(再版)小公子　若松賤子譯　廿八錢　郵税四錢
吾黨之女子教育　巖本善治著　八錢　郵税二錢
腓立比物語　櫻井成明譯　廿八錢　郵税六錢
俳諧史傳　布川靜淵著　廿七錢　郵税四錢
善悪の岐　中島俊子著　十七錢　郵税四錢
猫と鼠　女學雜誌社編　四錢　郵税二錢

此他十七種あり委細は廣告に精し

日本宗教大取次

哲學書院◎警醒社◎好明館◎女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金　一冊定價　金拾錢　一年前金　金壹圓（無郵税）

廣告料　一行（廿七字詰）一回　前金十錢　同三回以上一割引　同六回以上二割引（二十行以上一割引○三十行以上二割引○四十行以上四割引。但し不道徳なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

送金　爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし

注文　注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日内務省許可
明治廿八年十一月廿四日印刷
明治廿八年十一月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

鈴木弘恭大人講述

六版

百人一首講義

百人一首の講義多かるうち、此書に及ぶはなしとて販路年々に擴まり、早く第六版を重ぬるに至れり、

一冊正價二十五錢、郵稅四錢

東京下六番町　女學雜誌社

日本宗教　第三號

十月十日發兌

活火熱血……………………………………社説
非上正錢翁の傳を讀む……………………社説
宗教の性質を論して佛教徒に望む………釋宗演
殺生戒論の批評を讀む……………………加藤弘之
形神論………………………………………巖本善治
戰後の神道…………………………………柴田禮一
救世軍來……………………………………青柳猛
眞宗大意……………………………………廣幡貫一郎
社交に於るトルストイ伯…………………小西増太郎
早稲田伯に聞く……露伴と宗教を談ず……
佛教因果説爭論○救世軍に對する論評○基督教会の感化及獨立
○思潮數十派

一冊八錢郵稅一錢○半年前金四十六錢

東京下六番町六番地　日本宗教發賣所

本社出版書籍

（再版）小公子　若松賤子譯　廿八錢　郵稅四錢
吾黨之女子教育　巖本善治著　八錢　郵稅二錢
立諸物語　櫻井成明譯　廿八錢　郵稅六錢
俳比史傳　布川靜淵著　廿七錢　郵稅四錢
善惡の岐　中島俊子著　十七錢　郵稅四錢
猫と鼠　女學雜誌社編　四錢　郵稅二錢

此他十七種あり委細は廣告に精し

日本宗教大取次

◎女學雜誌社◎哲學書院◎警醒社◎好明館

女學雜誌定價表

前金	一冊價　金拾錢 一年前金　金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行　一回（廿七字詰）　前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 ○十行以上一割引○二十行以上二割引○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日内務省許可
明治廿八年十一月廿四日印刷
明治廿八年十一月廿五日發行

東京市麹町區下六番町六番地
發行兼編輯者　巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者　根岸高光

東京市麹町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）